三重県埋蔵文化財調査報告 133-7

井尻遺跡発掘調査報告

1996・3

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、三重県多気郡勢和村波多瀬字井尻に所在する、井尻（いじり）遺跡の発掘調査報告である。

2　本書は、平成７年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第７分冊である。

3　調査は、平成７年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

技師　西村（旧姓　野口）美幸　　研修員　松葉和也

4　当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行い、以下のものが補助した。全体の編集は西村が行った。執筆は西村、松葉が分担して行い、目次に明記した。写真撮影は西村、松葉が行った。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口愛、井田美奈子、
楠純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、
豊田幸子、冨楽幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、浜崎佳代、
早川陽子、堀内博子、松本春美、松月浩子、森島公子、柳田敬子

5　調査にあたっては、勢和村在住の各位、勢和村教育委員会、および県農林水産部農村振興課、松阪農林事務所、農業開発公社からご協力を頂いた。

また、奥義次氏（松阪高等学校）、久保勝正氏（上野商業高等学校）、新田剛氏（鈴鹿市教育委員会）にはいろいろなご教示を頂いた。記して感謝申し上げる。

6　挿図の方位は、全て真北で示している。なお、磁針方位は西偏６°20′（昭和61年）である。

7　当報告書で用いた遺構番号は、通番となっている。(以下に言う pitを除く)
また、番号の頭には、見た目の性格により以下の略記号を付けた。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝　　pit ：柱穴、小穴

8　当報告書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターに保管している。

9. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ　前言 …… (西村)… 1
Ⅱ　位置と環境 …… (松葉)… 2
Ⅲ　調査の成果～層位と遺構～ …… (西村)… 7
Ⅳ　調査の成果～出土遺物～ …… (西村)… 13
Ⅴ　結語 …… (西村)… 19
Ⅵ　付論　井尻遺跡出土遺物の自然科学分析について …… 23

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　遺跡地形図 …… 4
第３図　調査区位置図 …… 4
第４図　Ａ地区遺構平面・断面図 …… 5
第５図　Ｂ・Ｃ・Ｄ地区遺構平面・断面図 …… 6
第６図　ＳＫ１７・７６平面・断面図 …… 7
第７図　縄文時代土坑平面・断面図 …… 8
第８図　Ｐｉｔ１平面・断面図 …… 9
第９図　出土遺物実測図(1) …… 12
第10図　出土遺物実測図(2) …… 13
第11図　出土遺物実測図(3) …… 14
第12図　出土遺物実測図(4) …… 15
第13図　出土遺物実測図(5) …… 16
第14図　出土遺物実測図(6) …… 17
第15図　出土遺物実測図(7) …… 18

表 目 次

第１表　遺構観察表 …… 9
第４表　出土遺物観察表 …… 20

図版目次

図版１　Ａ地区全景、ＳＫ17集石除去前、ＳＫ17集石除去後、ＳＫ40、Ｐｉｔ１
図版２　出土遺物(1)
図版３　出土遺物(2)
図版４　出土遺物(3)

Ⅰ 前　　言

1　調査の契機

井尻遺跡は、多気郡勢和村に所在する遺跡で、平成７年度県営畜産環境整備事業（多気勢和地区）に伴う分布調査により新たに発見された。当遺跡は事業により壊される恐れがあったので、平成７年２月23日と平成７年７月10日に試掘調査（第３図 ■ ）を行った結果、小穴や落ち込み状の遺構と共に縄文時代と中世の遺物を多量に確認した。そこで松阪農林事務所との協議の結果、工事対応が不可能な部分についての本調査を行うことになった。

2　調査の経過

⑴　調査経過概要

調査は、事業により掘削される部分２か所の本調査と、事業により遺構に影響を受ける可能性のある部分２か所の立会調査を行った。

調査に参加して頂いたのは勢和村波多瀬地区在住の方々である。ここに御名前を記し、御礼申し上げたい。

岩井一正、岩井幹枝、池尾須磨子、車谷繁、
坂口富子、高橋いく、高橋キヌ、高橋すみゑ、
高橋なみへ、高橋正子、高橋三千子、高橋光一
高橋美津子、高橋美代枝、高橋保美、高橋誉海子
田口娃子、田中綾子、森田美春　　（敬称略）

⑵　調査日誌（抄）

７月11日　表土除去。
７月13日　プレハブ設置、ベルトコンベアー搬入。
７月14日　レベル移動、Ａ地区地区杭設定。
７月18日　作業員初日、Ａ地区検出開始。
　　検出面がわかりづらい。
７月21日　ＳＫ17掘削、多量の石が入っている。
７月26日　拳大の礫が円形に集中している遺構をいくつか検出。
７月27日　表土掘削時にこのあたりから縄文土器が多く出土したため、小さい道具に変えて包含層掘削を行う。
７月28日　Ｄ・Ｅ列から中世の土器が集中して出土。
　　墨書山茶椀も出土。
８月２日　猛暑が続く、Ｄ・Ｅ列は遺構がはっきりせず、少しずつ掘り下げていく。
８月４日　異形石製品出土。
８月７日　Ｂ～Ｄ地区の立会調査。
～８日　松阪高校体験発掘、計６名の参加を得る。
８月14日～16日　盆休み。
８月17日　Ａ地区実測用ポイント設置。
８月18日　Ｂ～Ｃ地区測量基本杭設置。
８月21日　Ａ地区検出・掘削作業再開。
８月23日　ＳＫ６７、埋設土器検出。
９月８日　Ａ地区写真撮影。
９月11日～14日　Ａ地区個別遺構実測。
９月13日　ベルトコンベアー撤去。
９月18日　Ａ地区完掘、Ｂ地区検出開始。
９月19日　Ｃ・Ｄ地区検出開始。
９月20日　Ｃ地区検出終了、遺構なし。
９月22日　Ａ地区遺構実測。
９月26日　作業員終了。
10月５日　図面、だめ押し作業終了。
　　プレハブ搬出。
　　松阪農林事務所へ引渡し。

⑶　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官あてに行っている。

・法第57条の３第１項（文化庁長官あて）
平成７年７月７日付け農振第 698号（県知事通知）
・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
平成７年６月21日付け教文第1114号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長あて）
平成８年１月26日付け教文第18号（県教育長通知）

Ⅱ　位置と環境

三重と奈良の県境、高見山付近を源にする櫛田川は１市４町１村を貫き、伊勢湾へと注ぐ。

井尻遺跡(1) は、この櫛田川が、勢和村と松阪市境にさしかかった中流右岸に所在している。この付近は河岸段丘が発達しており、両岸は高低差20ｍほどの段丘崖を成している。本遺跡もこの河岸段丘面上にあり、岸からは 100ｍほどの距離にある。

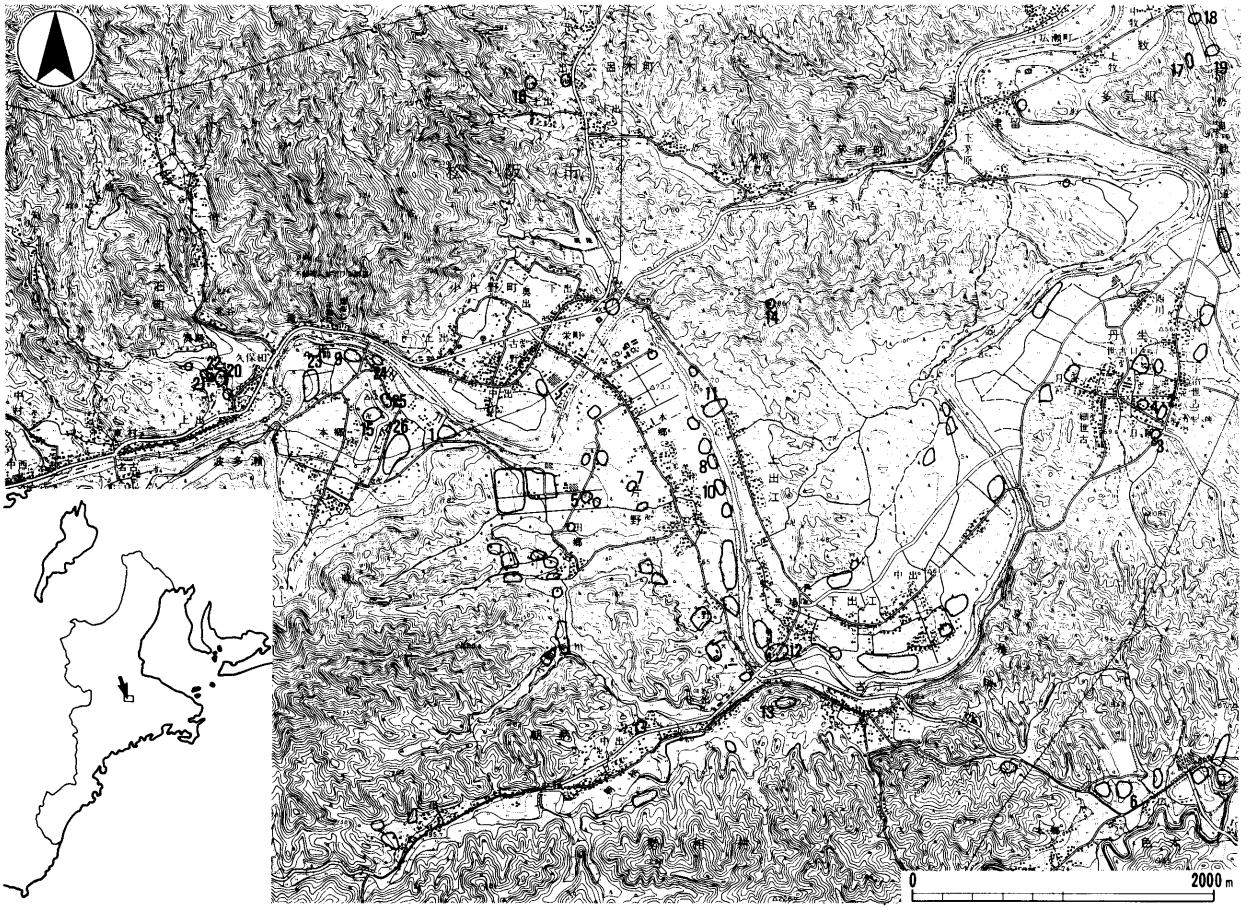
周囲の地形を詳しく見ると、本遺跡の南側の山裾には小さな谷があり、櫛田川に連なっている。その結果、この谷と櫛田川に挟まれた部分は、舌状に張り出している。本遺跡は、この舌状部分に立地している。

勢和村丹生付近は、水銀の原料である辰砂を産出することが古くから知られ、奈良時代以降に本格的な採掘がされる[①]。一方、縄文時代後期には、辰砂を原料とする水銀朱が赤色顔料として盛んに用いられていたことがわかっている[②]。松阪市王子広遺跡では、後期初頭から朱が使われており、後期後半の多気町新徳寺遺跡・嬉野町天白遺跡では原料の辰砂も見つかっている[③]。縄文時代に使われた辰砂の産地は特定されていないが、丹生付近が有力視される[④]。

以下には、縄文時代と中世に限定して、周囲の遺跡を概観したい。

櫛田川流域の旧石器時代の遺跡は、２・３か所を数えるのみである。しかし、旧石器時代末から縄文時代初頭にかけて、櫛田川中流域の遺跡数が増加する。勢和村野々尻遺跡(2) 、大曽遺跡(3) 、柳浦遺跡(4) では、縄文時代草創期前後の有茎尖頭器が、また、同村上広遺跡(5) では木葉形尖頭器がそれぞれ単独出土している。宮川水系ではあるが、同村大間広遺跡(6) では草創期の石器群や早期の押型文土器が出土している。早期後半には、同村南新木遺跡(7) がある。

前期では勢和村アカリ遺跡(8) が知られる。この



第１図　遺跡位置図（１：50,000）　　（国土地理院「横野」１：25,000から）

遺跡では、前期土器と石鏃・石錘などの石器が出土している。遺跡の立地も河川に近く、漁撈が行われたことを示している。石材ではチャートに替わってサヌカイトの利用が多くなってくるようである。

中期では、勢和村浜井場遺跡(9) が挙げられる。この遺跡では瀬戸内系の船元式、関東系の五領ヶ台式、北陸系の新崎式の土器が出土しており、活発な地域間交流があったと考えられる。同村ソウダ遺跡(10)では、70㎝の石棒が単独出土している。中期から後期のものと推定されている。

後期になると、前半では勢和村宮切遺跡(11)、後半では同村新神馬場遺跡[5](12)の例がある。遺跡は河川に接した立地が多く、石錘の出土も多い。新神馬場遺跡では、文様の刻まれた石棒が出土している。石鏃などの石材はサヌカイトが一般的になってくる。

晩期は全県下で遺跡数が少なく、櫛田川流域も例外ではない。しかし後半になると、その数も増える。宮川水系の勢和村池ノ谷遺跡では石棒、石剣類の他、朱が塗られた土器や、辰砂が出土している。

中世には、櫛田川中流域に城館が築かれた。南北朝期には、五箇篠山城(13)が築かれている。室町以降、戦国時代に至るものには、五箇篠山城と、五箇篠山羅城(14)、波多瀬城(15)、六呂木城(16)、牧城(17)が挙げられる[6]。

牧城の隣接地では、伊勢自動車道建設に伴って、鍬形中世墓群[7](18)、釈尊寺遺跡[8](19)などが発掘調査された。鍬形中世墓群では、13基の中世墓が検出され、釈尊寺遺跡では15世紀後半の掘立柱建物２棟などが見つかっている。

その他、御所屋敷Ａ遺跡(20)、御所屋敷Ｂ遺跡(21)は大石館跡(22)に重なっていると思われ、興味深い。なお、大石館は北畠氏との関連が想定されている[9]。

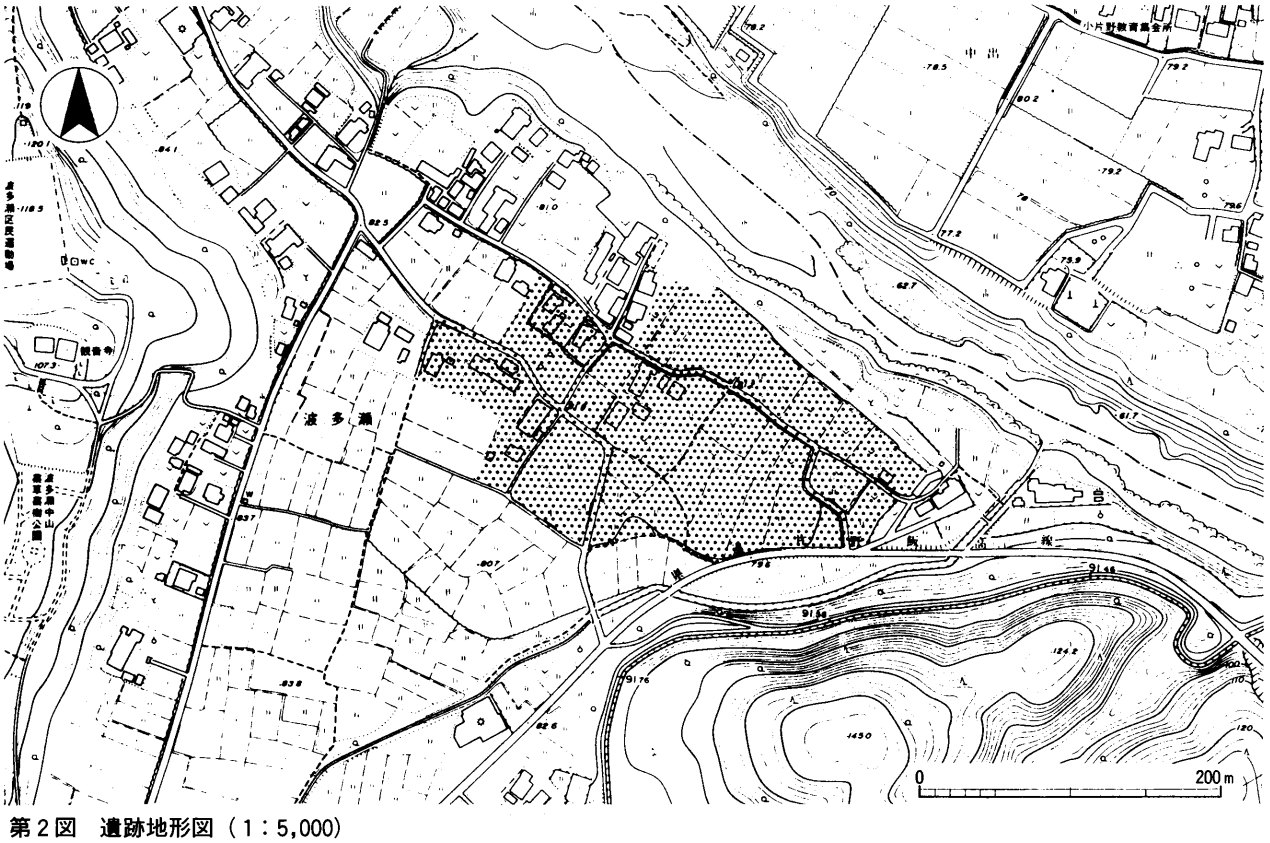
本遺跡の付近では、上ノ平遺跡(23)・浜井場遺跡・川辺遺跡(24)・馬場遺跡(25)から、土師器や山茶椀が出土している。また、本遺跡に隣接する松葉遺跡[10](26)では、平成６年に本調査が行われ、鎌倉～室町時代の溝が確認されている。いずれも波多瀬城との関係が注目される。

[註]

① 小林秀「丹生水銀の消長」(『わたしたちのふるさと勢和』勢和村史編集委員会、1995年)
② 奥義次「朱のルーツをめぐって」(『わたしたちのふるさと勢和』勢和村史編集委員会、1995年)
③ 小浜学・西村修久「新徳寺遺跡（第１次)」(『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』三重県埋蔵文化財センター、1995年)
森川幸雄『天白遺跡』(三重県埋蔵文化財センター、1993年)
④ 注②参照
⑤ 岩田直衛ほか『新神馬場遺跡発掘調査報告書』(三重県立津高等学校地歴部、1972年)
⑥ 『三重の中世城館』(三重県教育委員会、1976年)
⑦ 野原宏司「鍬形（牧）中世墓群」(『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第１分冊２、三重県教育委員会、1989年)
⑧ 田村陽一「釈尊寺（中牧遺跡)」(『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第１分冊１、三重県教育委員会、1989年)
⑨ 注⑥参照
⑩ 『三重県埋蔵文化財センター年報６』(三重県埋蔵文化財センター、1995年)

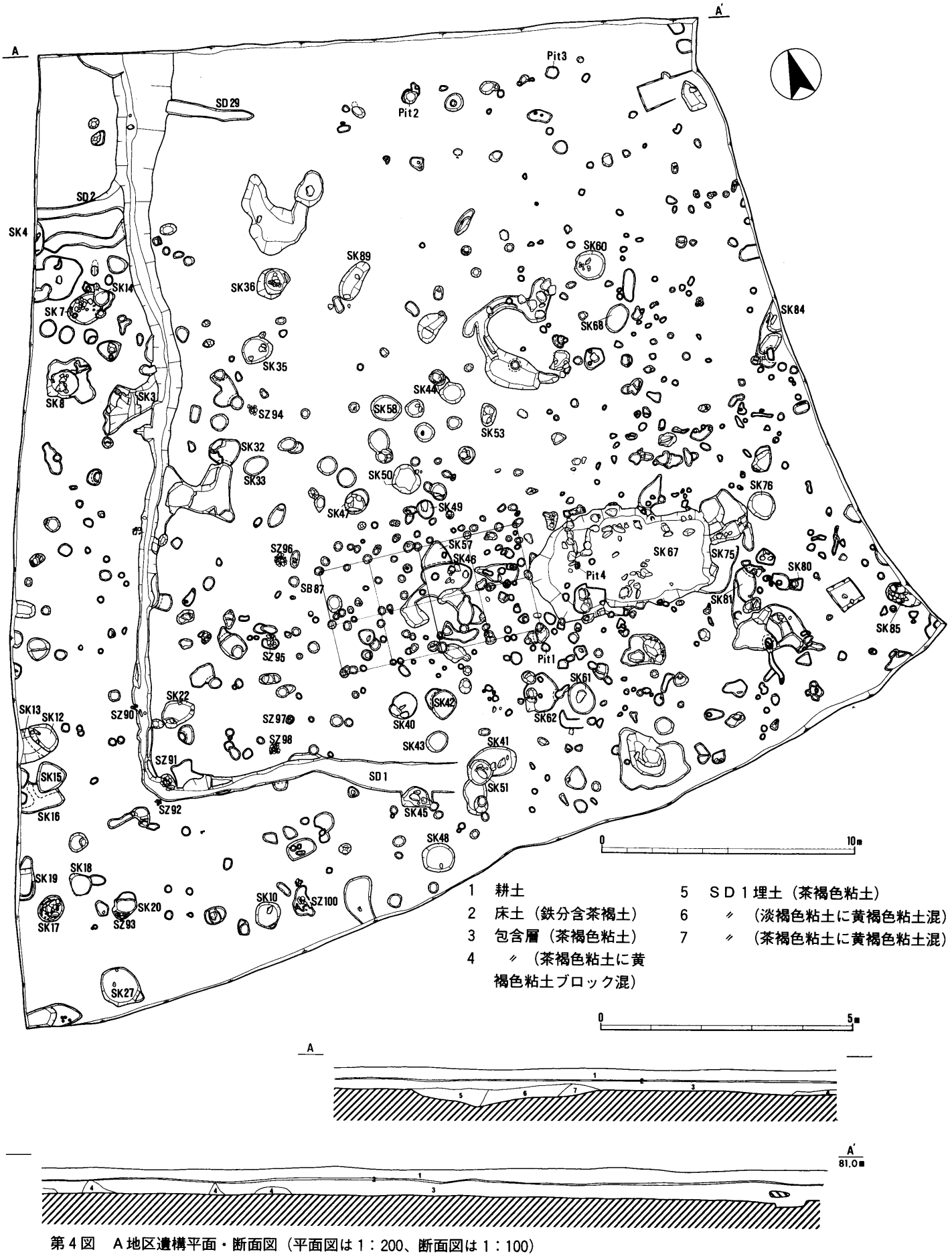
[参考文献]

・奥義次「第二編通史・第一章原始」(『飯高町郷土誌』、飯高町郷土誌編纂委員会、1986年)
・奥義次「縄文遺跡」(『多気町史』通史　第二編　原始　第二章、多気町史編纂委員会、1992年)

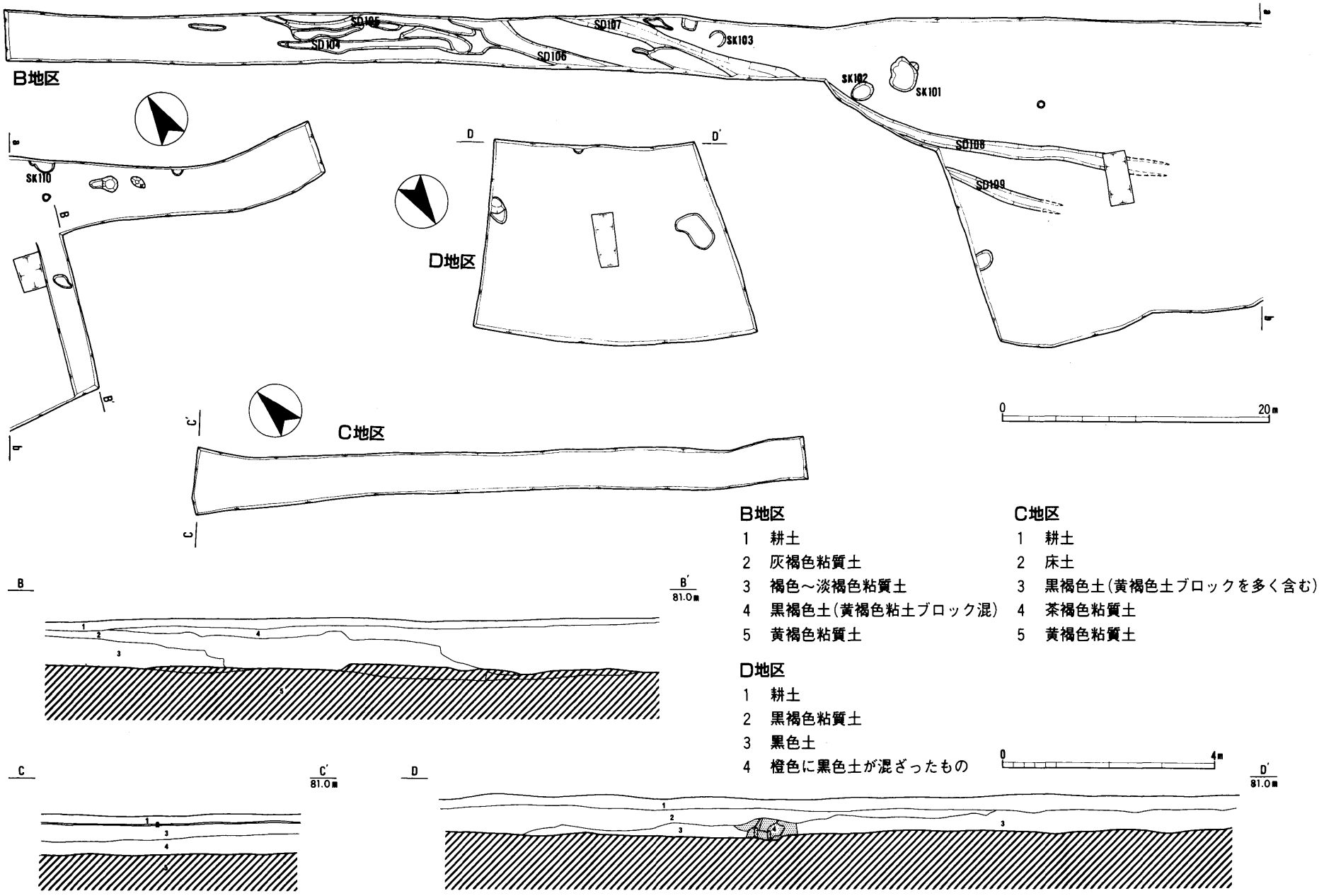


第２図　遺跡地形図（１：5,000）

第３図　調査区位置図（１：2,000　■：試掘坑）



第４図　Ａ地区遺構平面・断面図（平面図は１：200、断面図は１：100）



第５図　Ｂ・Ｃ・Ｄ地区遺構平面・断面図（平面図は１：400、断面図は１：100）

Ⅲ　調査の成果～層位と遺構～

1　調査の方法

⑴　調査区の設定

当遺跡の調査に当たっては、北側の地区をＡ地区、その南側の排水路部分をＢ地区、その東側をＣ地区、Ｂ地区の南の調査区をＤ地区として調査を行った。

各図面の方位は、測量杭からの磁北を測り、東へ６°20′移動させて求めた真北を使用した。

⑵　小地区の設定

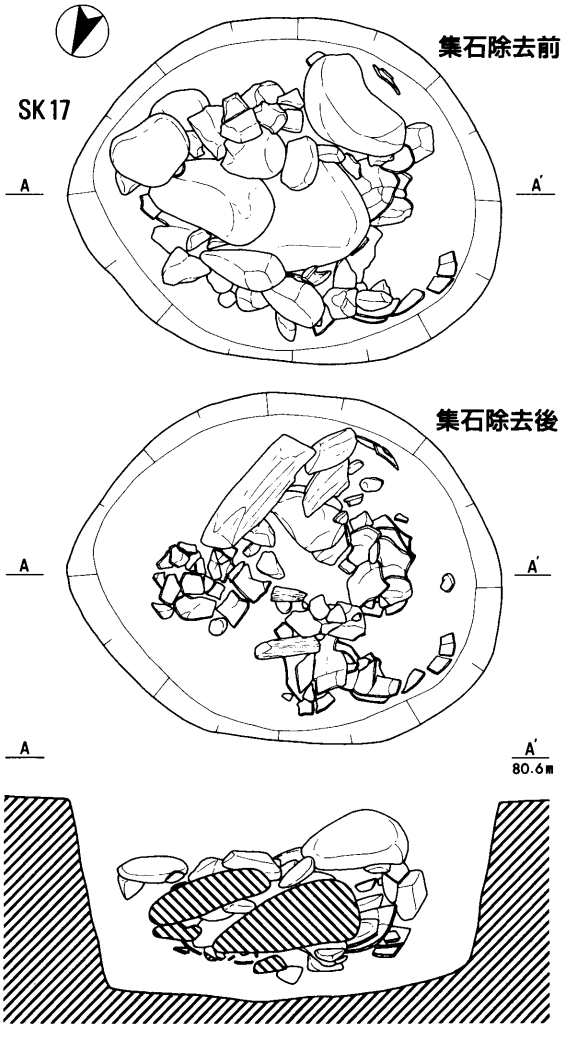
Ａ・Ｂ地区は、任意の点をもとに、４ｍ方眼を切り、Ａ地区は北西からＡ１～、Ｂ地区はア１～として小地区を設定した。Ｃ・Ｄ地区は面積も小さく、遺構が希薄と思われたので小地区の設定はしなかった。

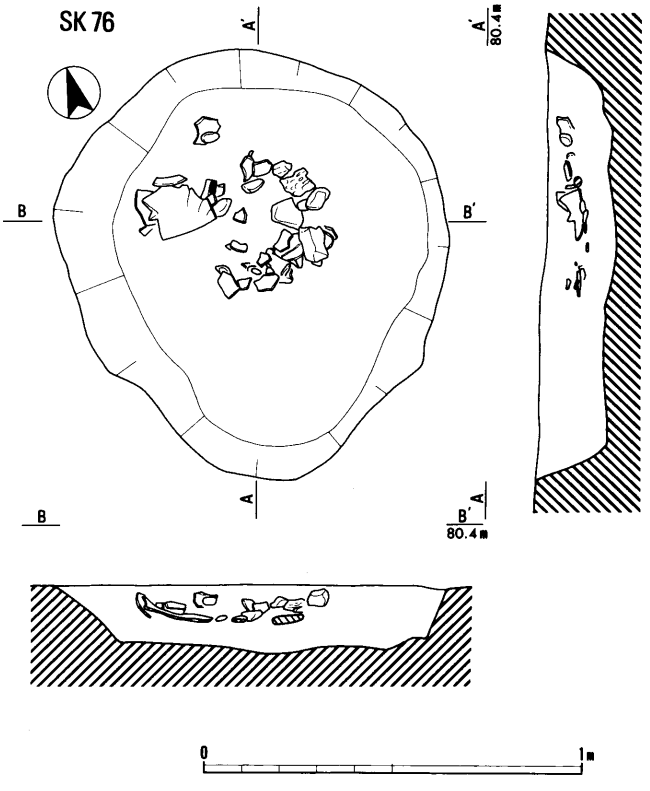
2　基本層序

調査区は、櫛田川に向かって舌状に張り出す地形の中央部である。Ａ地区は北東に向かって緩やかに低くなる。基本層序は上から耕作土、床土、黒ボク系の包含層、黄褐色土で、黄褐色土の上面を検出面とした。包含層の厚さは20～40㎝で、縄文土器および中世の土器を多量に包含する。

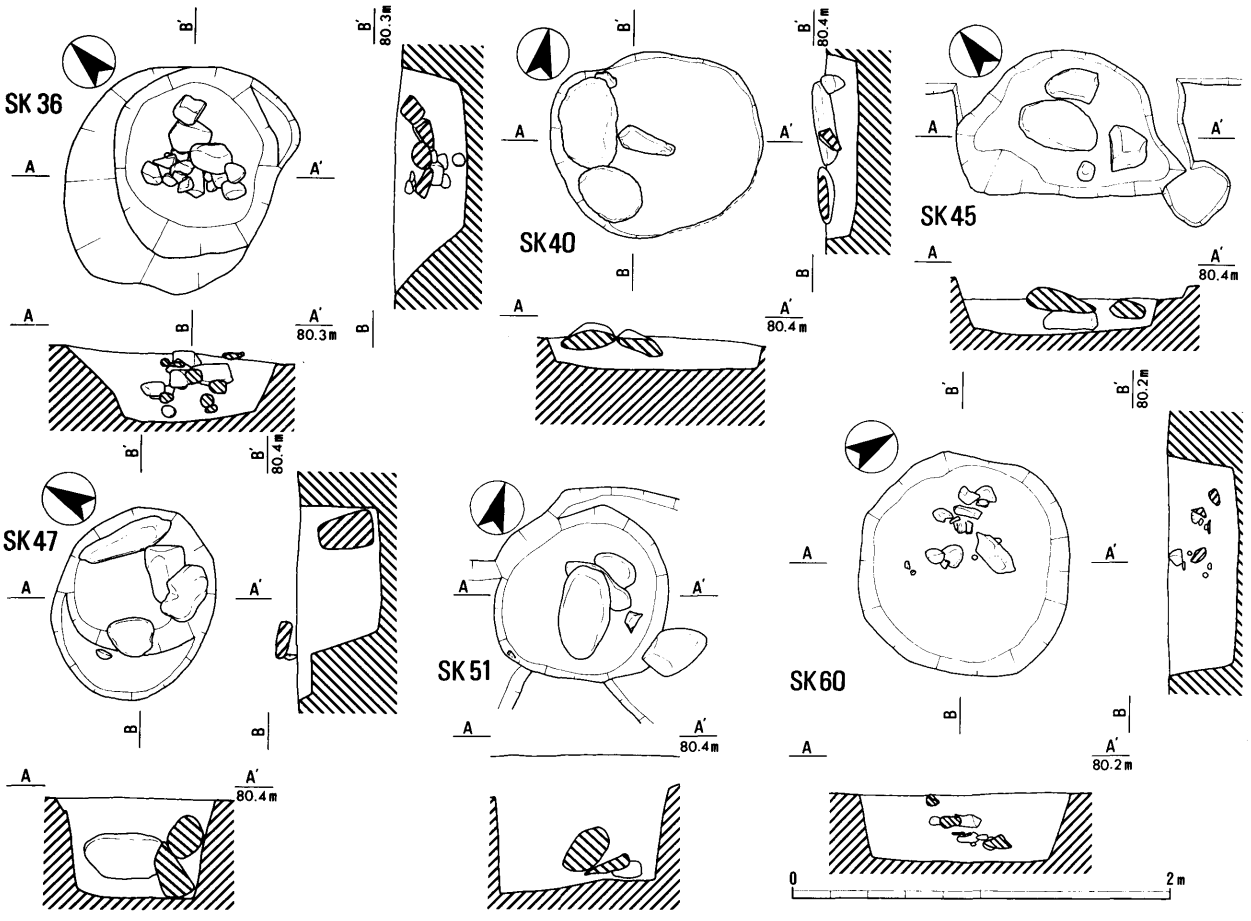
Ｂ地区は南東に向かって緩やかに低くなる。基本層序は上から耕作土、灰褐色系粘質土と褐色から淡褐色系粘質土の包含層、黄色系粘質土で、黄色系粘質土の上面を検出面とした。南東部には包含層の上、耕作土の下に客土がなされている。包含層出土の遺物は少量である。

Ｃ地区も南東に向かって低くなり、基本層序は上から耕作土、床土、客土、褐色系粘質土の包含層、





第６図　ＳＫ１７・７６平面・断面図（１：20）



第７図　縄文時代土坑平面・断面図（１：40）

黄褐色系粘質土となっており、黄褐色系粘質土の上面を検出面とした。包含層から遺物はほとんど出土しなかった。

Ｄ地区の掘削は、工事で削平される深さに止めたが、土層の傾きから原地形は南東に低くなっていたことが分かる。基本層序は上から耕作土、黒褐色系粘質土と黒色土の包含層で、黒色土には中世の土器の入った橙色の粘土ブロックを含む。

3　遺構

調査により、縄文時代後期初頭から前葉の遺構、鎌倉時代末ごろの遺構、近世と思われる遺構を確認した。ここでは、縄文時代の遺構を中心に記述する。

なお、数値等は遺構一覧表を参照されたい。

(1)　縄文時代の遺構

土坑35基、埋設土器１基等を検出した。土坑のうち13基は内部に人頭大程度の石が入っていた。

ここでは主だったものの記述を行う。

A　土坑

ＳＫ17（第６図）

Ａ地区の南西部で検出した長辺1.1ｍ、短辺0.9ｍの楕円形の土坑である。検出面直下から40㎝下にかけて人頭大の石がぎっしり詰め込まれていた。それを除去した結果、底より10㎝程浮いて後期前葉の土器が出土した。一部原位置を保っていると思われるものもある。土器の周辺や下からはトチの実の炭化物も出土しており、この土坑を特徴づけている。

ＳＫ76（第６図）

Ａ地区の東部で検出した長辺1.1ｍ、短辺１ｍの楕円形の土坑である。検出面からの深さは20㎝と浅い。底より10㎝程浮いて縄文時代後期初頭の土器が多量に出土している。

ＳＫ36（第７図）

Ａ地区の北西部で検出した長辺1.3ｍ、短辺1.2ｍの楕円形の土坑である。検出面からの深さは43㎝とやや深い。内部に拳大の石が10点程詰まっていた。

ＳＫ40（第７図）

Ａ地区の南中央部で検出した長径1.2ｍ、短径１ｍの楕円形の土坑である。検出面からの深さは20㎝と浅めである。人頭大の平らな石が数点入っている。

ＳＫ45（第７図）

Ａ地区の南西部で、ＳＤ１に切られる形で検出した長辺1.2ｍ、短辺0.8ｍの隅丸方形の土坑である。検出面からの深さは30㎝と浅めである。人頭大の平らな石が数点入っている。

ＳＫ47（第７図）

Ａ地区の中央部で検出した長径1.1ｍ、短径0.8ｍの楕円形の土坑である。検出面からの深さは45㎝と深めである。人頭大の石が数点入っている。

ＳＫ51（第７図）

Ａ地区の南部中央で検出した径0.9ｍの円形の土坑である。検出面からの深さは63㎝と深い。底面に人頭大の石が数点入っている。

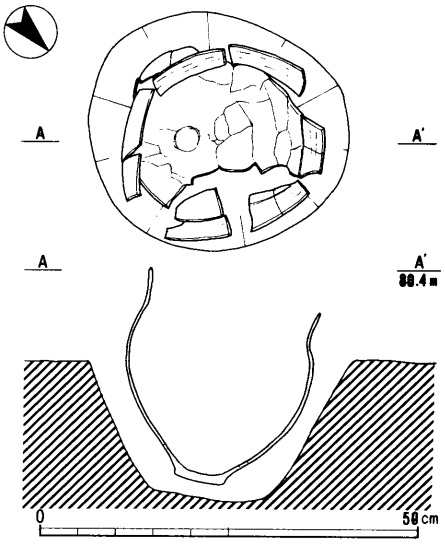
ＳＫ60（第７図）

Ａ地区の東部南寄りで検出した径1.2ｍの円形の土坑である。検出面からの深さは37㎝とやや深めである。拳大の石数点とともに、縄文時代後期初頭の土器が出土した。

Ｂ　埋設土器

Ｐｉｔ１（第８図）

Ａ地区の南東部で検出した。土器は粗製深鉢１個体がほぼ正立して設置されている。土器の底部は残っているが、全体に割れがあり、胴部の一部は欠損していた。ただし、この欠損が埋設時の打欠きの痕跡であるかどうかは確認できなかった。



第８図　Ｐｉｔ１平面・断面図（1：10）

⑵　鎌倉時代末期の遺構

掘立柱建物１棟（ＳＢ87）、方形の土坑１基（ＳＫ67）、溝１条（ＳＤ１）等を検出した。内容は遺構観察表のとおりである。

⑶　近世以降の遺構

集石遺構10基（ＳＺ90～100）を検出した。これらは、線上に並ぶものもあり、礎石建物の基礎である可能性もある。内容は遺構観察表のとおりである。

○縄文時代の遺構

土坑

遺構名	規　模　(cm)	深さ(cm)	備　考
ＳＫ３	(長径) 170 × (短径) 150	41	
ＳＫ４	(長径) 残130 × (短径) 不明	37	炭塊出土
ＳＫ７	(長径) 150 × (短径) 120	42	配石土坑、ＳＫ14に切られる
ＳＫ８	(長径) 220 × (短径) 200	56	配石土坑、内部130×100の円形土坑
ＳＫ10	(長径) 110 × (短径) 105	25	
ＳＫ12	(長径) 130 × (短径) 90	43	
ＳＫ13	(長径) 残130 × (短径) 不明	39	
ＳＫ15	(長径) 125 × (短径) 115	44	
ＳＫ16	(長径) 残170 × (短径) 不明	32	

第１表　遺構観察表 (1)

遺構名	規模 (cm)	深さ(cm)	備考
ＳＫ17	(長径) 115 × (短径) 90	84	配石土坑、土器が多量に出土、堅果類出土
ＳＫ18	(長径) 125 × (短径) 115	36	
ＳＫ19	(長径) 175 × (短径) 残60	30	
ＳＫ20	(長径) 120 × (短径) 90	22	
ＳＫ22	(長径) 140 × (短径) 115	53	
ＳＫ27	(長径) 190 × (短径) 145	37	
ＳＫ35	(長径) 120 × (短径) 100	34	配石土坑
ＳＫ36	(長径) 130 × (短径) 120	43	配石土坑
ＳＫ40	(長径) 115 × (短径) 100	20	配石土坑
ＳＫ41	(長径) 280 × (短径) 100	18	ＳＫ51の上層
ＳＫ42	(長径) 115 × (短径) 95	14	
ＳＫ43	(長径) 85 × (短径) 80	32	異形石製品出土
ＳＫ44	(長径) 65 × (短径) 60	22	配石土坑
ＳＫ45	(長径) 120 × (短径) 80	30	配石土坑、SD1に切られる
ＳＫ47	(長径) 105 × (短径) 85	45	配石土坑
ＳＫ48	(長径) 125 × (短径) 115	22	
ＳＫ51	(長径) 95 × (短径) 90	63	配石土坑
ＳＫ53	(長径) 85 × (短径) 75	41	配石土坑
ＳＫ57	(長径) 120 × (短径) 残90	18	ＳＫ46に切られる、双耳壺出土
ＳＫ58	(長径) 120 × (短径) 100	11	
ＳＫ60	(長径) 120 × (短径) 120	37	配石土坑、土器が多量に出土
ＳＫ61	(長径) 130 × (短径) 105	21	
ＳＫ62	(長径) 155 × (短径) 135	10	
ＳＫ76	(長径) 115 × (短径) 100	20	土器が多量に出土
ＳＫ80	(長径) 50 × (短径) 40	31	
ＳＫ84	(長径) 残70 × (短径) 不明	31	
ＳＫ85	(長径) 不明 × (短径) 130	72	配石土坑
ＳＫ89	(長径) 165 × (短径) 80	47	

埋設土器

遺構名	規模 (cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	(長径) 35 × (短径) 30	20	

○古代の遺構

土坑

遺構名	規模 (cm)	深さ(cm)	備考
ＳＫ14	(長径) 残190 × (短径) 170	6	

○中世の遺構

掘立柱建物

遺構名	規模 桁行×梁間	総柱・側柱の別	桁行 (cm)	梁間 (cm)	棟方向	掘り方 形状	掘り方 径(cm)	掘り方 深(cm)	柱痕径 (cm)	備考
ＳＢ87	4間×2間	総柱	800	430	N72°E	円形	約30	約40	——	一部束柱のない部分もある

第1表　遺構観察表 (2)

溝

遺構名	幅(m)	長さ(m)	深さ(m)	方位	流れる方向	備考
SD1	0.4～3.7	41	0.2～0.5	N30°E N63°W	南東から北西 南西から北東	区画溝か？ 途中で90°屈曲する
SD2	0.4～1.5	3.5	0.1～0.2	N65°W	北西から南東	区画溝か？SD1に流入
SD29	0.4～0.6	3.4	0.1	N55°W	南東から北西	区画溝か？SD1に流入

土坑

遺構名	規模(cm)	深さ(cm)	備考
SK32	(長径) 130 × (短径) 110	56	
SK33	(長径) 95 × (短径) 70	51	
SK46	(長径) 195 × (短径) 110	9	
SK49	(長径) 75 × (短径) 65	12	
SK50	(長径) 115 × (短径) 100	13	
SK67	(長径) 700 × (短径) 410	18	
SK68	(長径) 115 × (短径) 80	17	
SK75	(長径) 420 × (短径) 残180	16	SK67に切られる
SK81	(長径) 130 × (短径) 70	19	

○近世以降の遺構

集石遺構

遺構名	規模(cm)	深さ(cm)	備考
SZ90	(長径) 30 × (短径) 30	25	SD1を切る
SZ91	(長径) 70 × (短径) 55	15	
SZ92	(長径) 30 × (短径) 25	－	
SZ93	(長径) 50 × (短径) 25	10	
SZ94	(長径) 50 × (短径) 35	10	
SZ95	(長径) 55 × (短径) 35	20	
SZ96	(長径) 50 × (短径) 50	10	
SZ97	(長径) 35 × (短径) 30	15	
SZ98	(長径) 40 × (短径) 40	15	
SZ100	(長径) 30 × (短径) 30	－	

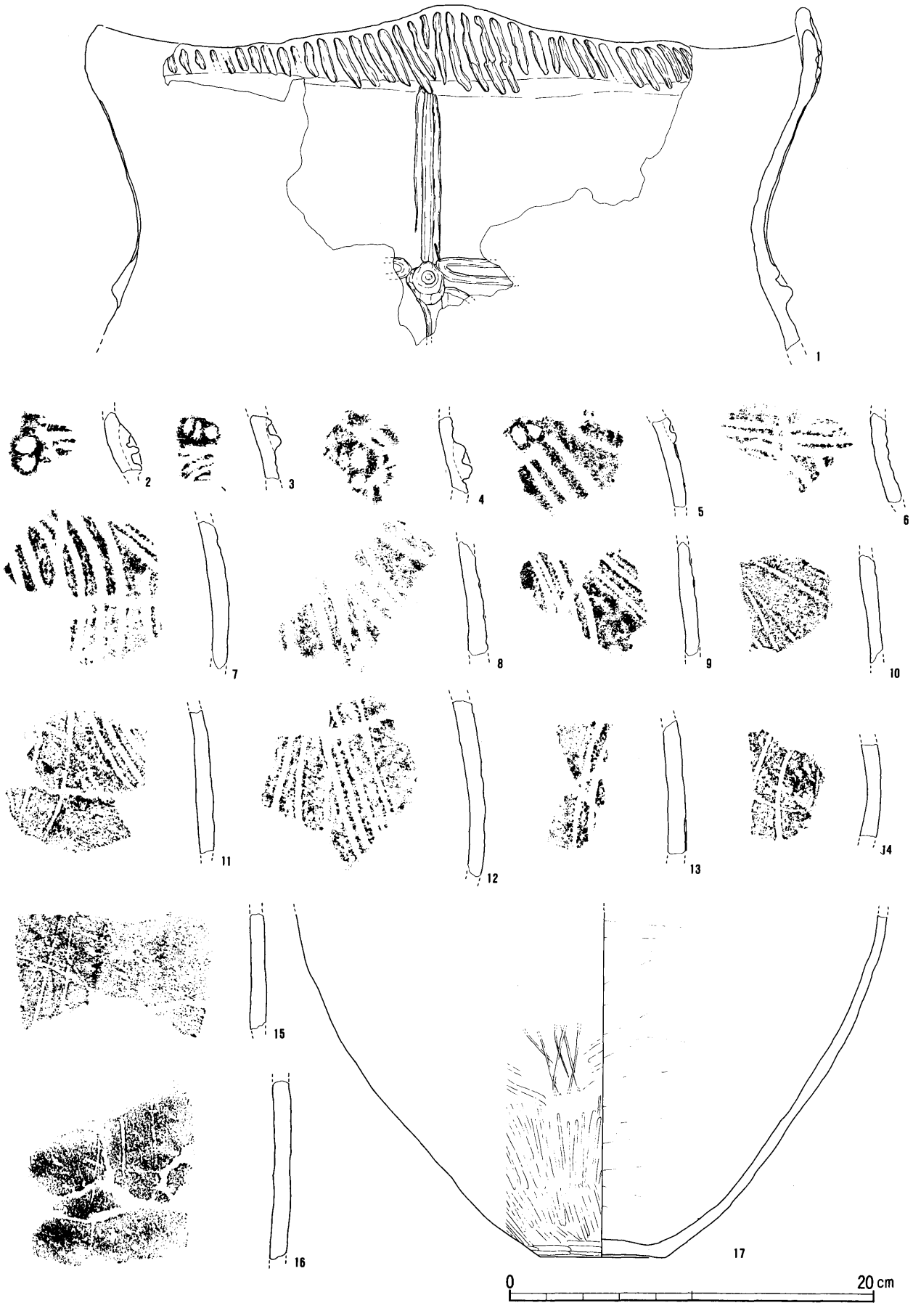
土坑

遺構名	規模(cm)	深さ(cm)	備考
SK101	(長径) 250× (短径) 200	30	
SK102	(長径) 180× (短径) 120	25	
SK103	(長径) 100× (短径) 100	20	
SK110	(長径) 200× (短径) 残80	40	

溝

遺構名	幅(m)	長さ(m)	深さ(m)	方位	流れる方向	備考
SD104	0.5～1.0	13	0.3	N60°W	不明	
SD105	0.5～1.0	16	0.4	N60°W	不明	
SD106	1.0～2.0	12	0.4	N35°W	不明	SD109と同一遺構か
SD107	0.5～1.5	14	0.3	N40°W	北西から南東	SD108と同一遺構か
SD108	1.0	22	0.2	N45°W	北西から南東	SD107と同一遺構か
SD109	0.5～1.0	8	0.2	N35°W	不明	SD106と同一遺構か

第1表　遺構観察表 (3)



第９図　出土遺物実測図 (1)（1：3）

Ⅳ　調査の成果～出土遺物～

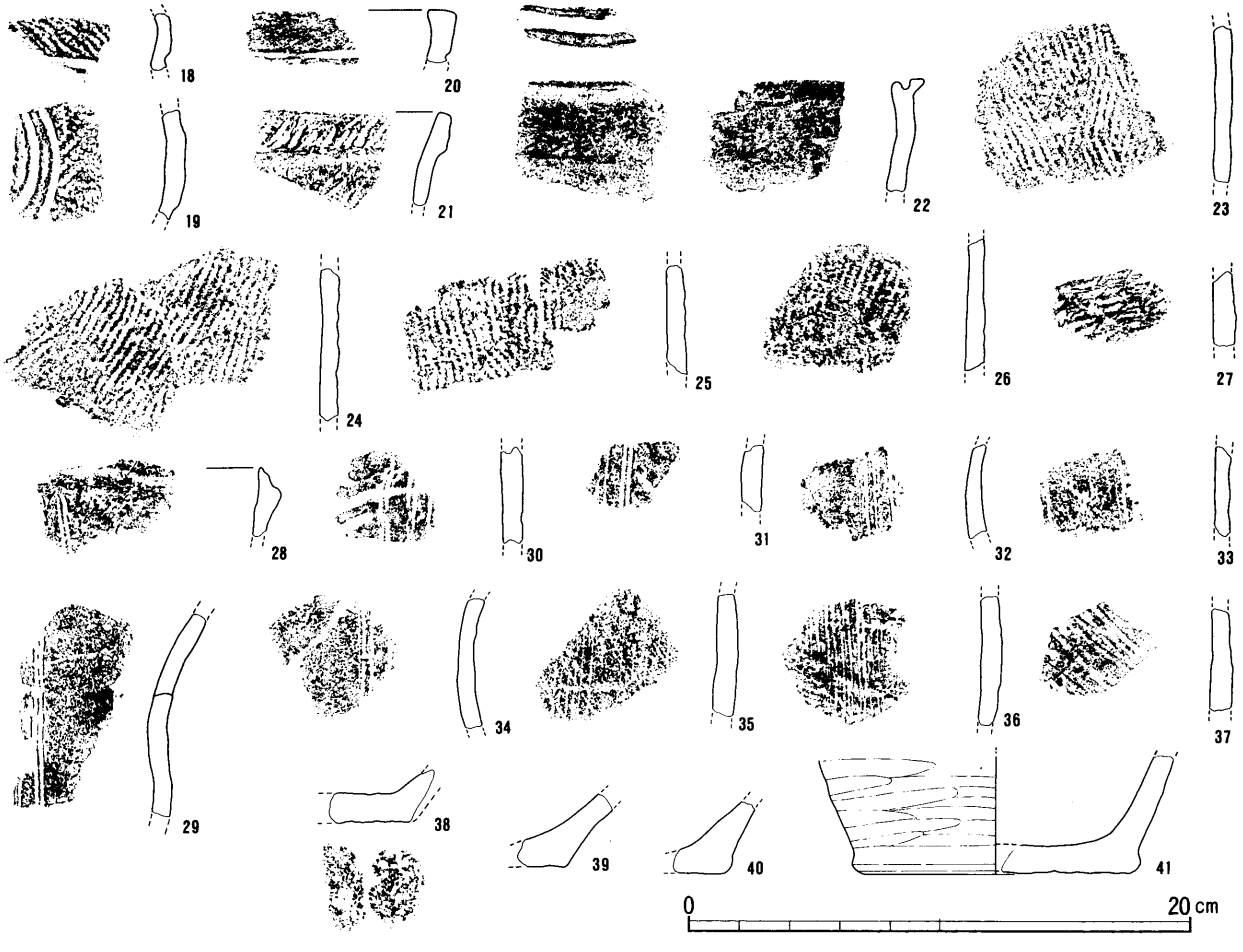
当遺跡からは、縄文時代後期、古墳時代及び鎌倉時代末頃の遺物が出土している。本書では縄文時代後期の遺物の紹介をし、他は別の機会とする。

1　ＳＫ17出土の遺物

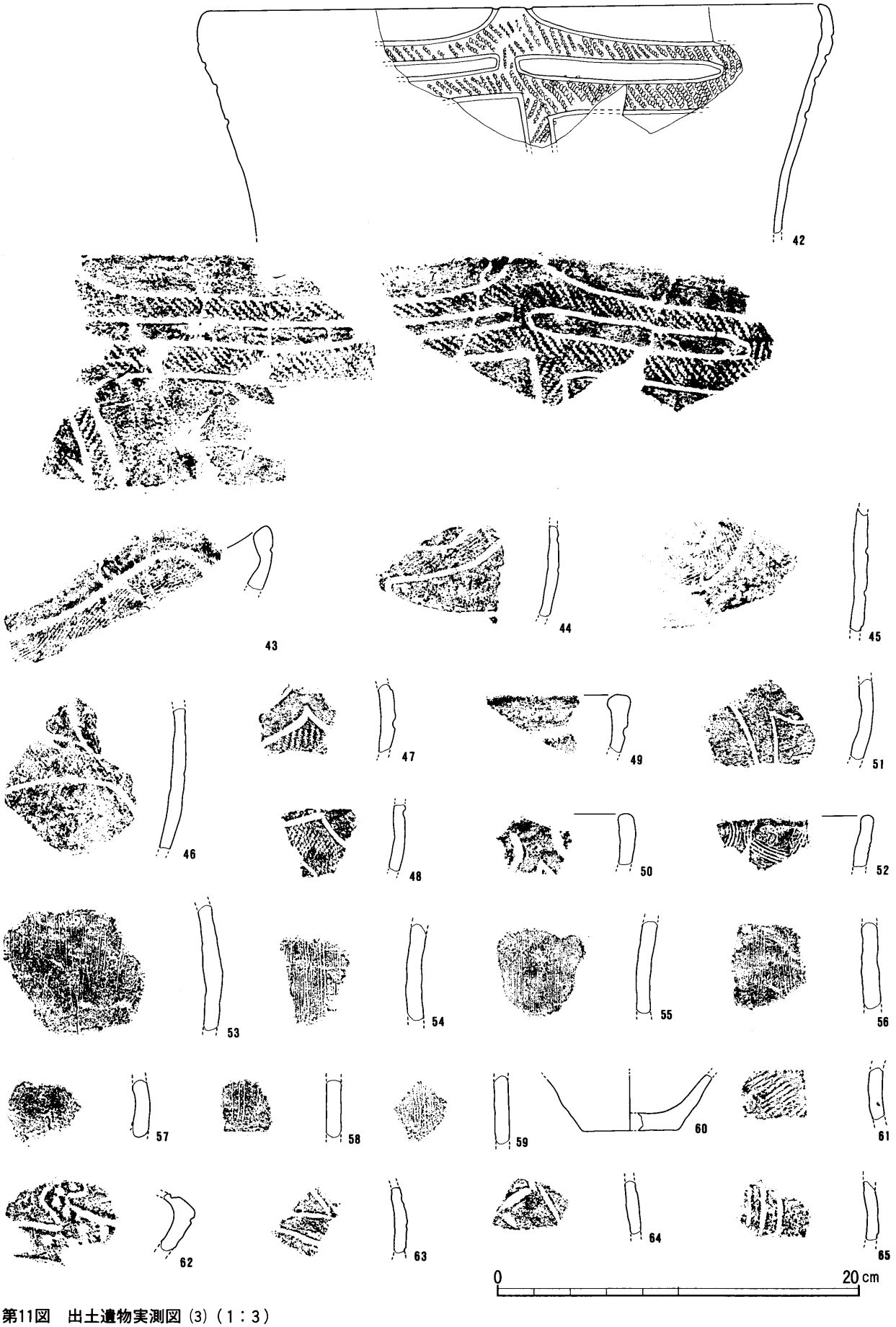
縄文土器深鉢（１～17）は同一個体である。波状の口縁をもち、頸部にくびれがある。頸部の文様は無文帯と縦方向の隆帯からなる。胴部は横線の下に垂下文を施す。隆帯と横帯の交点には「８」字状の浮文を施す。堀之内Ⅰ式の影響を受けるが、北白川上層式Ⅰ期の範疇でとらえられよう。18・19は磨消縄文を持つ土器である。20～22は、北白川上層式Ⅰ期の口縁部である。23～27は外面に縄文を施している。23～26は同一個体であろうか。28～36は外面に条線を施したものである。28～31は２条、32～34は３条を単位とし、35・36は多条である。37は外面に条痕文を施したものである。38～41は底部破片で、38の底部には網代痕らしきものが残っている。

2　ＳＫ76出土の土器

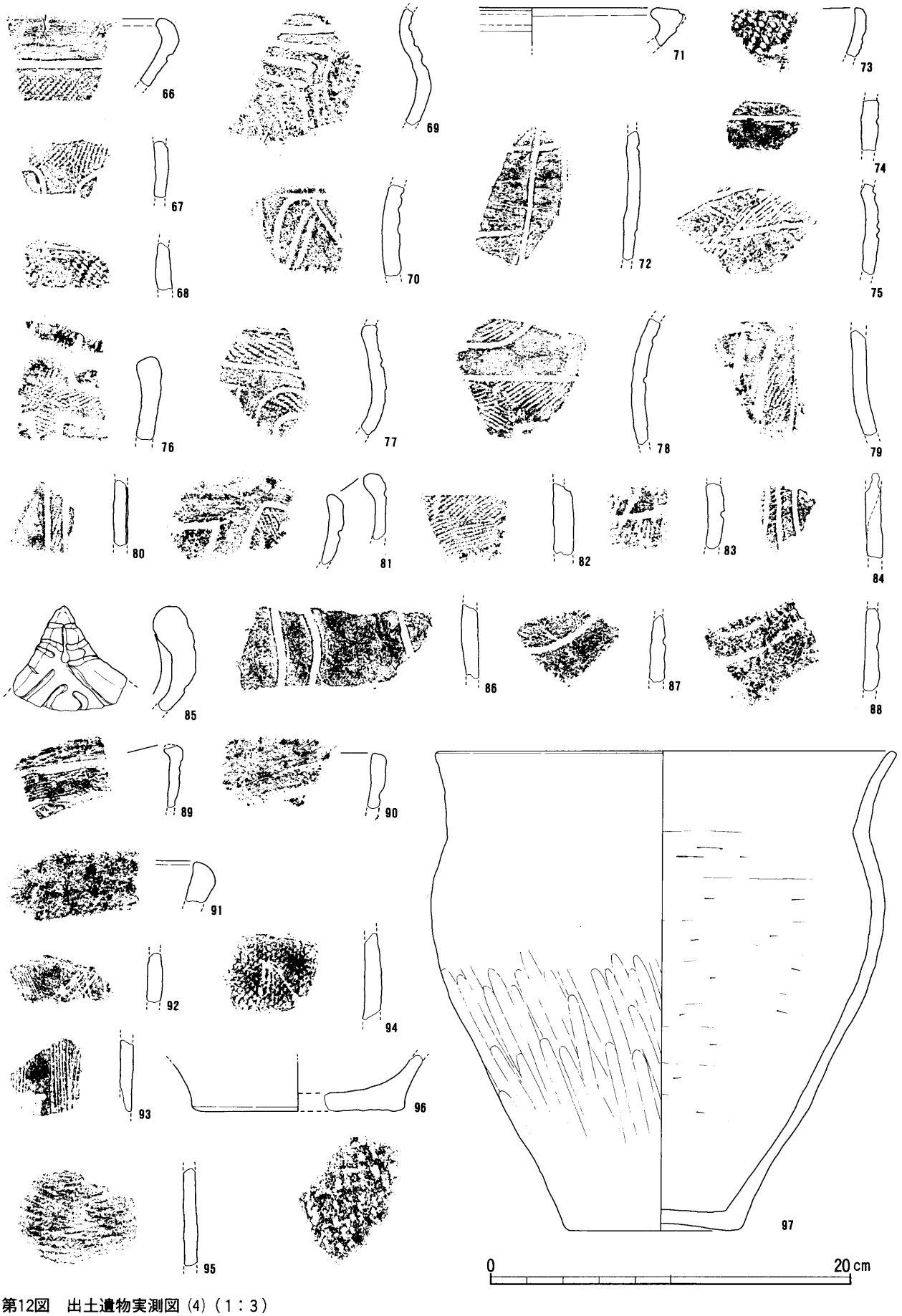
42～48は外面に磨消縄文が施文されたものである。42は窓枠状の模様構成を持ち、中津Ⅰ式の特徴をもつ。43～48も中津Ⅰ式の範疇におさまろう。49～51は中津式と同一の文様構成を持つと思われるが、沈線内を縄文で充填しない。52～59は外面に条線を施している。52は曲線を組み合わせた模様である。60は粗製土器の底部である。



第10図　出土遺物実測図 (2)（1：3）



第11図　出土遺物実測図 (3)（1：3）



第12図　出土遺物実測図 (4)（1：3）

3　ＳＫ45出土の土器

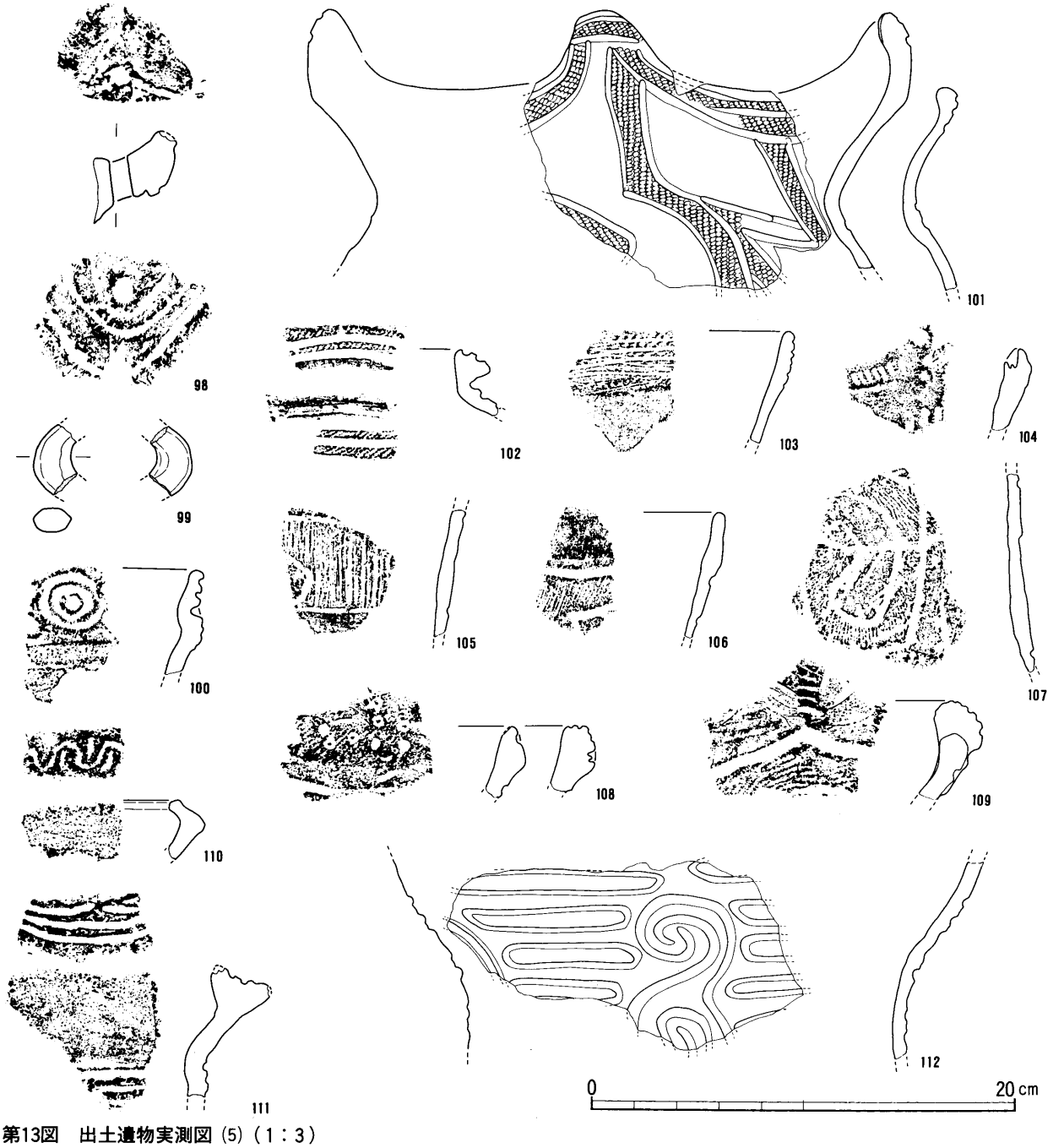
61は外面に縄文を施したものである。62は口縁部にＳ字状の沈線文と刺突文を施したものである。63～65は中津式と同一の文様構成を持つと思われるが、沈線内を縄文で充填していない。

4　ＳＫ47出土の土器

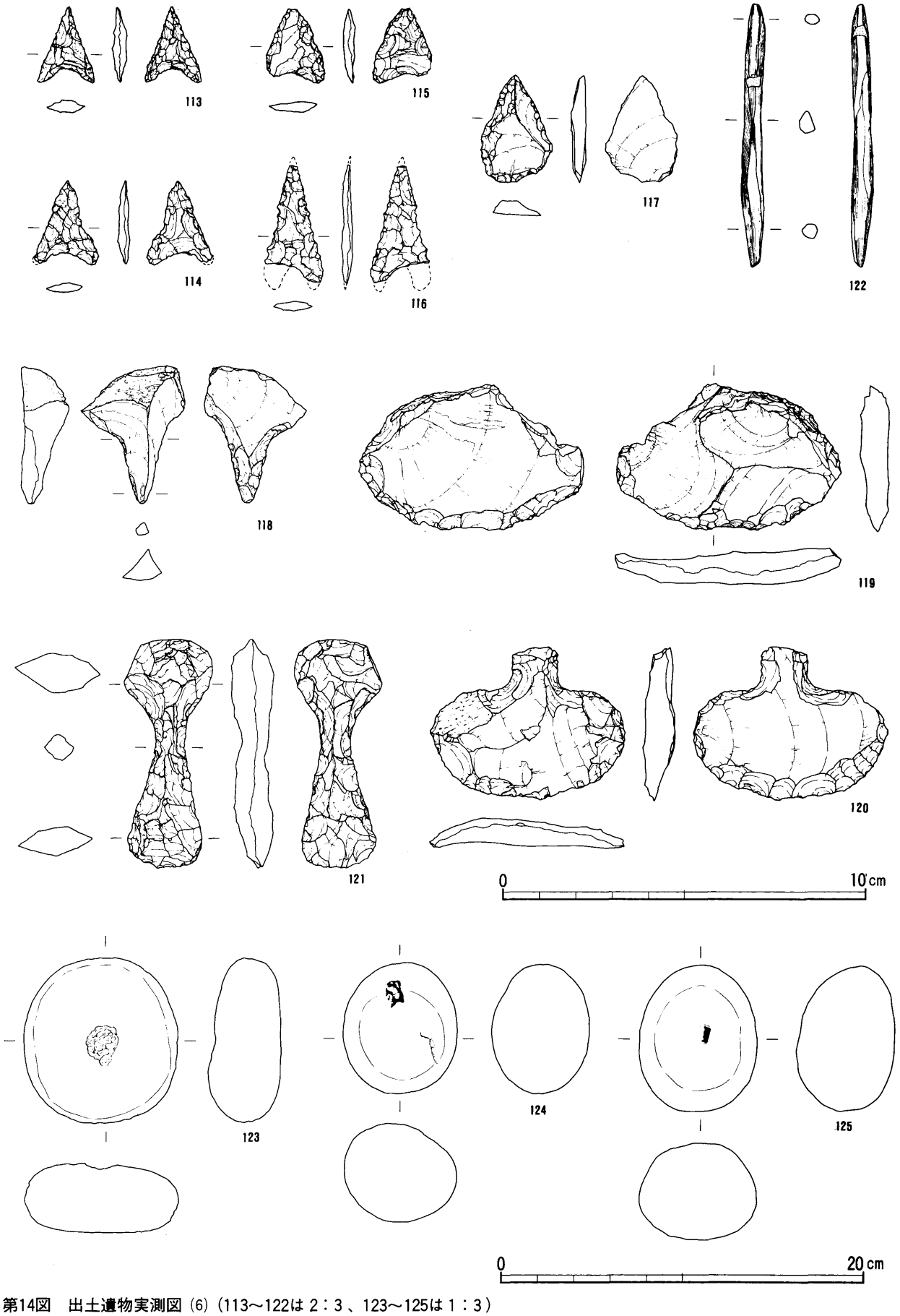
66～68は外面に磨消縄文を施したもの。中津Ｉ式併行期のものである。

5　ＳＫ51出土の土器

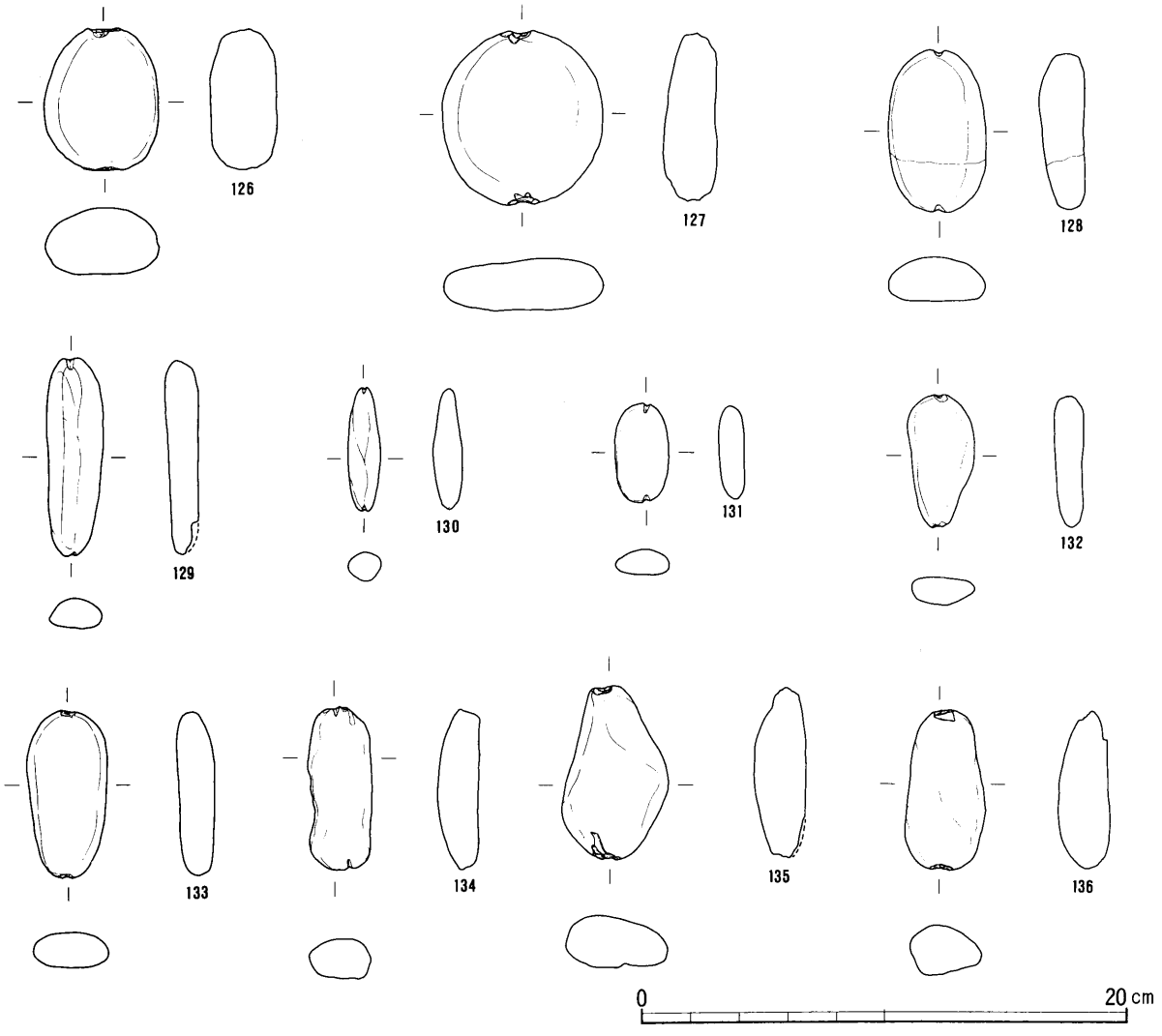
69は北白川上層式Ｉ期併行期と考えられるものである。71・73は口縁部を肥厚させ施文したもの、72は外面に磨消縄文を施したもので、どちらも中津式の範疇でとらえられよう。



第13図　出土遺物実測図 (5)（1：3）



第14図　出土遺物実測図 (6)（113～122は 2：3 、123～125は 1：3）



第15図　出土遺物実測図 (7)（1：3）

6　ＳＫ60出土の土器

75～83は外面に磨消縄文を施したものである。中津式併行期のものである。84は福田ＫⅡ式併行期のものであろうか。85は沈線による模様を持つもので、中津式から福田ＫⅡ式併行期のものである。86～88は中津式と同一の文様構成を持つと思われるが、沈線内を縄文で充填しない。89～91は口縁部を肥厚させ施文している。92・93は外面に条線を施す。92は曲線を組み合わせた模様である。94は外面に縄文を施している。95は外面に条痕文を施している。96は底に網代痕をもつものである。

7　Ｐｉｔ１出土の土器

97は外面にミガキ調整を行う粗製土器である。埋設土器として使用されていたもので、概ね福田ＫⅡ式から北白川上層式１期併行期のものと考えられる。

8　その他の遺構出土の土器

98はＳＫ57から出土した双耳壺で、沈線内を縄文で充填している。中津式併行期に位置づけられよう。99・100は鎌倉時代末頃の溝ＳＤ１に混入していたもので、99は深鉢の口縁部である。100は北白川上層式１期併行期の口縁部である。101はＳＫ20出土のもので、福田ＫⅡ式併行期のもの。102・103はＳＫ12出土のもので、102は注口土器の口縁部とも考えられる。広瀬土坑40段階併行期のものであろう。103は北白川上層式１期併行期に位置づけられる。104はＳＫ80出土のもので、口縁部に刺突文と沈線文をもつ。広瀬土坑40段階から北白川上層式Ⅰ期併行期のものであろう。105～107は中津式併行期の土器で、沈線内を細密な沈線で充填している。

9　包含層出土の土器

108は竹管状の刺突文を持つ土器で、中期末的な様相を持つ。109は中津式に併行する。110・111は広瀬土坑40段階併行期のものである。112は外面に沈線でＳ字文を施している。系譜は不明だが広瀬土坑40段階から北白川上層式Ｉ期併行期のものと考えられる。

10　石器

石鏃（113～116）はいずれも小型の凹基無茎鏃である。117は石鏃の未製品であろうか。石錐（118）はＳＫ７から出土したもので、断面三角形状の剝片に二次調整を施し、錐部をつくりだしている。先端を欠損する。掻器（119）は楕円形で弧状の刃部をもつ。石匙（120）は横型で刃部が楕円形のものである。異形石製品（121）は丁寧な加工が施されている。磨製石製品（122）は先端が磨かれている。凹石（123）は偏平な石材の一方に凹部がある。磨石（124・125）はどちらも有機物が付着している。敲石（126）は２面に敲打痕を残す。石錘（127～136）は切目石錘と打欠石錘がある。大きさにはバラエティーに富み、石材も不定形のものが多い。132～136は同一のピット（Pit２）から出土したものである。

Ⅴ　結　　語

1　石の入った土坑について

井尻遺跡では、13基の石の入った土坑が検出された。これらの土坑からは中津Ｉ式併行期から北白川上層式Ｉ期併行期の遺物が出土しており、後期初頭から前葉のものととらえられる。大きさは直径が１ｍ前後の楕円形で、深さは３種類ぐらいに分類できる。中に入っている石は、拳大の物から人頭大のものと大きさも不統一であり、出土する土器の量もそれぞれに違いがある。これらの土坑については東庄内Ａ遺跡や中戸遺跡でも報告されている[①]。

この中で注目されるのがＳＫ17である。ＳＫ17は前述のとおり、人頭大の石の下から、石に潰された形で深鉢が確認され、さらに炭化したトチの実が出土している。当時の状況はトチの実を入れた深鉢の上に石をおいていたのであろうか。他の土坑は土器の出土量が少ないが、ＳＫ17がこれらの性格を示唆する資料となるのだろうか。

2　井尻遺跡出土の縄文土器について

井尻遺跡出土の縄文土器は、そのほとんどが後期初頭から前葉の範疇でとらえられる。これらの土器は東日本の影響を受けながらも、西日本の土器様式の範疇に納まるものと考えられる。またＳＫ17出土のトチの実の分析により3630±90y.B.P.[②]の年代が測定されたが、この土坑からは北白川上層式Ｉ期の一括資料が出土しており、これらの土器の実年代を知る上での良好な資料となろう。

3　井尻遺跡の位置づけについて

縄文時代後期の櫛田川流域には、ある程度拠点的な遺跡が川筋に数km間隔で位置しており、生活領域の分かれていたことが示唆されている[③]。また、これらの遺跡から切目石錘が多出しており、漁撈活動の本格化も示唆されている[④]。井尻遺跡は、今回の調査では住居跡こそ確認できなかったが、遺構や遺物の状況から、櫛田川流域に点在するある程度拠点的な遺跡の一つとして位置づけできよう。

[註]

① 谷本鋭二「東庄内遺跡」（『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県文化財連盟、1970年）
仁保晋作・千葉豊「中戸遺跡」（『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ｉ』、1989年）

② Ⅵ付論参照。y.B.P.の年代は1950年を基準としている。

③ 奥義次「第二編通史・第一章原始」（『飯高町郷土誌』飯高町郷土誌編纂委員会、1986年）
奥義次「多気町の旧石器・縄文遺跡」（『多気町史』多気町史編纂委員会、1992年）

④ 註③と同じ。

No.	登録No.	器　種	出土位置	技法・調整等の特徴	胎土・色調・焼成	備　　考
1～17	註①	有文深鉢	ＳＫ17	外面：ミガキ後沈線、隆帯、８字状文、波状口縁、平底 内面：ナデ	橙色系、密	
18	16-1	〃	〃	外面：磨消縄文（単節） 内面：ナデ	褐色系、密	
19	15-8	〃	〃	外面：磨消縄文（単節Ｒ、横位） 内面：ナデ	〃	
20	16-4	〃	〃	外面：ナデ、沈線 内面：ナデ、口縁内面肥厚	灰褐色系、密	
21	16-6	〃	〃	口縁外面に肥厚、縄文施文、内面：ナデ 外面：縄文（無節Ｌ）	黒褐色系、密	
22	16-5	〃	〃	口縁端部を肥厚させ沈線１条を施す、内外面ミガキ	〃　、やや粗	
23	13-4	縄文地深鉢	〃	外面：縄文（単節）の斜縄文 内面：ナデ	橙色系、粗	粗製
24	13-3	〃	〃	〃	〃	〃
25	13-5	〃	〃	〃	〃	〃
26	14-1	〃	〃	〃	〃	〃
27	14-4	〃	〃	外面：縄文（単節Ｌ）の斜縄文 内面：ナデ	橙色系、密	〃
28	14-6	条線深鉢	〃	外面：２条を単位とする沈線 内面：ミガキ	黄褐色系、やや粗	半粗製
29	14-7	〃	〃	〃	灰褐色系、やや粗	〃
30	14-8	〃	〃	〃	〃	〃
31	15-2	〃	〃	〃	黄褐色系、やや粗	〃
32	15-4	〃	〃	外面：３条を単位とする沈線 内面：ミガキ	〃	〃
33	15-3	〃	〃	〃	〃	〃
34	15-5	〃	〃	〃	〃	〃
35	15-6	〃	〃	外面：多条の沈線（斜格子状） 内面：ナデ	〃	〃
36	15-7	〃	〃	外面：多条の沈線 内面：ナデ	〃 外面炭化	〃
37	16-3	無文深鉢	〃	外面：条痕文 内面：ナデ	灰褐色系、やや粗 外面炭化か	粗製
38	16-7	底部	〃	底部：網代痕 内面：ナデ	灰褐色系、密	
39	16-8	〃	〃	底部：不明 内面：ナデ	〃	
40	17-1	〃	〃	底部：不明 外面：ミガキ、内面：ナデ	〃	
41	13-1	深鉢	〃	底部：網代痕等なし 外面：ミガキ、内面：ナデ	褐色系、密	
42	21-1	有文深鉢	ＳＫ76	外面：沈線による区画後縄文（単節Ｒ横位） 内面：ナデ	灰褐色系、やや粗	
43	22-1	〃	〃	外面：細い原体による磨消縄文（単節） 内面：ナデ	〃	
44	22-2	〃	〃	外面：細い原体による磨消縄文（単節Ｒ） 内面：ナデ	〃	
45	22-3	〃	〃	外面：細い原体による磨消縄文（単節） 内面：ナデ	〃	
46	22-4	〃	〃	外面：磨消縄文（単節Ｒ、横位） 内面：ナデ	〃	
47	23-1	〃	〃	外面：磨消縄文（単節Ｌ） 内面：ナデ	〃	
48	22-5	〃	〃	外面：磨消縄文（単節Ｌ、横位） 内面：ナデ	〃	
49	22-7	〃	〃	口縁から内外面へ肥厚、端部ナデ 外面：沈線文、内面：ナデ	灰褐色系、やや粗	
50	23-2	〃	〃	外面：太い沈線文 内面：ナデ	〃	
51	23-3	〃	〃	外面：太い沈線文 内面：不明	灰褐色系、やや粗	
52	23-4	条線深鉢	〃	外面：４～６条の条線による曲線文 内面：ナデ	灰褐色系、やや粗	半粗製
53	23-6	〃	〃	外面：多条の条線 内面：不明	灰褐色系、やや粗 外面炭化か	〃
54	24-1	〃	〃	外面：多条の条線 内面：ナデ	〃	〃
55	23-5	〃	〃	〃	〃	〃
56	23-7	〃	〃	〃	〃	〃
57	23-8	〃	〃	〃	灰褐色系、やや粗	〃
58	24-2	〃	〃	〃	〃	〃
59	24-3	〃	〃	〃	灰褐色系、やや粗 外面炭化か	〃

第４表　出土遺物観察表 (1)

No.	登録No.	器　種	出土位置	技法・調整等の特徴	胎土・色調・焼成	備　　考
60	22-6	深鉢	〃	底部：網代痕等なし 外面：ナデ	灰褐色系、やや粗	粗製
61	24-8	縄文地深鉢	ＳＫ45	外面：縄文（無節Ｌ）の斜縄文 内面：ナデ	〃	〃
62	24-7	有文深鉢	〃	屈曲した口縁端部に沈線と刺突で施文 内面：ナデ	〃	
63	25-1	〃	〃	外面：沈線文 内面：不明	〃	
64	25-3	〃	〃	外面：沈線文 内面：ナデ	〃	
65	25-2	〃	〃	外面：沈線文 内面：ナデ	〃	
66	25-4	〃	ＳＫ47	外面：磨消縄文（単節Ｌ、横位） 内面：ミガキ	灰褐色系、密 外面炭化	
67	25-5	〃	〃	外面：細い原体による磨消縄文（単節Ｌ、横位） 内面：不明	灰褐色系、やや粗	
68	25-6	〃	〃	外面：磨消縄文（単節Ｒ、横位） 内面：ナデ	〃	
69	25-7	〃	ＳＫ51	外面：沈線文 内面：ナデ	灰褐色系、やや粗	
70	25-8	〃	〃	外面：沈線文 内面：ナデ	褐色系、密	
71	26-3	不明	〃	内面に肥厚、端部外面に２条の沈線 内・外面：ミガキ	黒褐色系、密	
72	26-2	有文深鉢	〃	外面：磨消縄文 内面：ナデ	灰褐色系、やや粗	
73	26-4	〃	〃	外面：太い縄文（単節Ｌ、横位） 内面：ナデ	褐色系、やや粗 外面炭化	
74	26-1	〃	〃	外面：沈線文 内面：ナデ	灰褐色系、やや粗	
75	17-8	〃	ＳＫ60	外面：沈線による区画後縄文充填 内面：ナデ	灰褐色系、やや粗	
76	17-5	〃	〃	外面：沈線による区画後縄文充填（単節Ｒ） 内面：ナデ	〃	
77	17-2	〃	〃	外面：沈線による区画太い原体による縄文充填(単節Ｒ) 内面：ナデ	褐色系、密	
78	17-3	〃	〃	外面：磨消縄文（単節） 内面：ナデ	灰褐色系、やや粗	
79	17-6	〃	〃	外面：磨消縄文（単節） 内面：ナデ	褐色系、密	
80	17-7	〃	〃	外面：磨消縄文（単節） 内面：ナデ	黄褐色系、密	
81	18-2	〃	〃	外面：磨消縄文（単節） 内面：ナデ	褐色系、やや粗	
82	18-1	〃	〃	外面：磨消縄文（単節Ｌ、横・斜位） 内面：ナデ	灰褐色系、密	
83	17-4	〃	〃	外面：磨消縄文（単節） 内面：ナデ	灰褐色系、やや粗	
84	18-6	〃	〃	外面：沈線文 内面：ナデ	〃	
85	19-3	〃	〃	肥厚した波状口縁の外面に沈線文 内面：不明	褐色系、やや粗	
86	18-3	〃	〃	外面：沈線文 内面：ナデ	灰褐色系、密	
87	18-4	有文深鉢	〃	外面：沈線文 内面：不明	灰褐色系、やや粗	
88	18-5	〃	〃	外面：沈線文 内面：ナデ	褐色系、やや粗	
89	19-4	〃	〃	口縁内面に肥厚 外面：沈線文、内面：ナデ	黒褐色系、やや粗	
90	19-5	〃	〃	口縁外面に肥厚 外面：沈線文、内面：ナデ	黄褐色系、やや粗	
91	19-6	〃	〃	口縁外面：縄文？ 〃 内面：ナデ	黄褐色系、やや粗	
92	18-8	条線深鉢	〃	外面：６条の条線による曲線文 内面：ナデ	褐色系、やや粗	半粗製
93	19-1	〃	〃	外面：多条の条線 内面：不明	灰褐色系、やや粗 外面炭化	〃
94	18-7	縄文地深鉢	〃	外面：太い縄文（単節）の斜縄文 内面：不明	灰褐色系、粗	粗製
95	19-2	無文深鉢	〃	外面：巻貝による条痕文 内面：ナデ	橙色系、粗	〃
96	19-7	深鉢	〃	底面：網代痕 外面：ナデ、内面：不明	灰褐色系、粗	

第４表　出土遺物観察表 (2)

No.	登録No.	器　種	出土位置	技法・調整等の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
97	2-1	無文深鉢	Pit 1	外面：ナデ、ヘラミガキ 内面：ケズリ	灰褐色系、粗	粗製深鉢埋設土器
98	1-2	双耳壺	ＳＫ57	把手中央部に縦に孔を貫通させる 沈線で区画後、縄文で充填	褐色系、やや粗	双耳壺の把手
99	22-6	有文深鉢	ＳＤ１	ナデ	褐色系、密	有文深鉢の口縁部
100	26-7	〃	〃	外面：口縁外面に渦巻状文 内面：ミガキ	灰褐色系、密	
101	29-1	〃	ＳＫ18 ＳＫ20	外面：太い沈線の磨消縄文（単節Ｒ） 内面：ナデ	褐色系、やや粗	
102	28-1	注口土器	ＳＫ12	口縁を外面に肥厚させ、縄文（単節Ｌ）施文後沈線を施す、内面：ナデ	褐色系、密 外面炭化	
103	28-2	有文深鉢	〃	口縁を外面に肥厚させ、沈線・刻目を施す 内面：ナデ	褐色系、密	
104	28-5	〃	ＳＫ80	外面：口縁端部に刺突、沈線文 内面：ナデ	灰褐色系、粗	
105	28-7	〃	Pit 3	外面：沈線による区画の中を細い沈線で充填 内面：ナデ？	灰褐色系、やや粗	
106	28-8	〃	〃	〃	〃	
107	28-6	〃	〃	〃	〃	
108	30-3	〃	包含層 Ａ-Ｅ３	口縁を外面に肥厚させ、縄文施文後竹管による刺突 内面：ナデ	黄褐色系、密	
109	30-4	〃	包含層 Ａ-Ｆ２	外面：磨消縄文（単節）、口縁端部の波頂部に刻目 内面：ナデ	灰褐色系、密	
110	30-2	〃	包含層 Ａ-Ｄ８	内に屈曲する口縁外面に沈線文 内面：不明	橙色系、密	
111	30-5	〃	包含層 Ａ-Ｆ３	外面頸部と内面に大きく肥厚する口縁の端部に沈線文、内面：ナデ	灰褐色系、粗	
112	30-1	〃	包含層 Ａ-Ｇ３	外面：窓枠状とＳ字をモチーフとした太い沈線文、 内面：ナデ	灰褐色系、やや粗	

No.	登録No.	器　種	出土位置	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
113	104-1	石鏃	包含層Ａ-Ｆ３	サヌカイト	2.1	1.55	0.35	0.68	
114	104-4	石鏃	包含層Ａ-Ｂ５	サヌカイト	2.3	1.8	0.3	0.71	
115	104-2	石鏃	包含層Ａ-Ｂ４	チャート	2.05	1.6	0.35	0.88	
116	104-3	石鏃	ＳＫ17	サヌカイト	3.2	1.6	0.35	1.03	
117	106-1	石鏃	ＳＤ１	サヌカイト	2.9	1.9	0.4	2.52	
118	106-2	石錐	ＳＫ７	サヌカイト	3.2	2.8	1.25	7.58	
119	105-2	掻器	ＳＤ１	サヌカイト	4.0	6.1	1.0	24.85	
120	105-1	石匙	ＳＫ61	サヌカイト	4.2	5.3	0.9	14.65	
121	106-4	異形石製品	ＳＫ43	サヌカイト	6.3	2.4	1.15	13.89	
122	106-3	磨製石製品	包含層Ａ-Ｂ７	片岩系	7.2	－	径0.65	3.60	
123	101-2	凹石	ＳＤ１	砂岩系	5.0	8.4	3.95	402.46	
124	101-3	磨石	Pit 4	砂岩系	7.1	6.25	5.4	287.49	
125	101-4	磨石	ＳＺ96	砂岩系	7.95	6.45	5.4	350.82	
126	101-1	敲石	包含層Ａ-Ｆ６	砂岩系	5.8	4.65	2.7	100.20	
127	102-5	打欠石錐	包含層Ａ-Ｂ１	砂岩系	7.1	6.5	2.2	139.18	
128	102-1	切目石錐	包含層Ａ-Ｆ２	砂岩系	6.6	4.0	1.9	82.91	
129	102-2	切目石錐	包含層Ａ-Ｆ８	不明	8.1	2.35	1.4	40.46	
130	102-4	切目石錐	包含層Ａ-Ｂ７	不明	5.05	1.35	1.2	9.97	
131	102-3	切目石錐	包含層Ａ-Ｂ７	不明	4.05	2.25	1.05	15.44	
132	103-3	切目石錐	Pit 2	不明	5.4	2.75	1.2	25.46	
133	102-6	切目石錐	Pit 2	不明	6.8	3.25	1.55	53.64	
134	103-1	切目石錐	Pit 2	不明	6.6	2.6	1.9	53.76	
135	103-2	打欠石錐	Pit 2	不明	7.1	4.4	2.1	77.0	
136	103-4	打欠石錐	Pit 2	不明	6.5	3.3	2.1	61.16	

〔註〕①１～17は同一の個体と考えられるが、破片ごとに実測・収納を行った。対応する整理番号は下表の通り。

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
登録No.	3-1	7-2	7-1	7-4	7-3	8-3	9-1	8-6	9-3	11-4	11-1	9-2	9-4	11-3	12-1	40-1	39-1

第４表　出土遺物観察表 (3)

Ⅵ　付論　井尻遺跡出土遺物の自然科学分析について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回、井尻遺跡から検出された遺物について、自然科学分析調査を行った。炭化物の種実同定と放射性炭素年代測定である。目的等の詳細は各項目毎に示した。

1．種実同定

(1)　目的

井尻遺跡（多気郡勢和村波多瀬井尻所在）は櫛田川中流の南岸に位置する遺跡で、川に向かって緩やかに傾斜している。今回調査が行われたＡ地区からは縄文時代後期と鎌倉時代末頃の遺構・遺物が検出されている。分析対象とするのは、縄文時代後期の土器を伴う配石土坑（SK17）から検出された炭化種実で、当時の植物質食料利用に関する情報を得る目的で分析を行う。

(2)　試料

試料は、遺構内から取り上げられた炭化種実試料４点と、遺構内の土壌試料１点の計５点である。試料の詳細については、結果と併せて表１に示す。

(3)　方法

遺構内から取り上げられた炭化種実については、その形態的特徴から種類を同定する。一方、土壌試料は、低温で乾燥後、塊状の土を静かに解しながら１㎜の篩を通し、残渣中から炭化物を抽出して同定用試料とした。

(4)　結果

表１　種実同定結果

遺構名	取り上げ日など	試料の質	点数	同　定　結　果
SK17	950906	単体	約70	トチノキ
SK17	950819	単体	1	細片のため同定不能
SK17	950905	単体	1	細片のため同定不能
SK17 ⑯	950906	単体	2	細片のため同定不能
SK17	950906	土壌	約10	細片のため同定不能

結果を表１に示す。多量の種実が入っている試料は、他に比べて比較的大型のものが多いが、すべてが破片である。大型の破片で１㎝程度であり、半球型に近い個体も多いが、不定形なものが多い。また、表面にはしわ状の模様がみられず、比較的平滑である。このような特徴から、トチノキ（Aesculus turbinata Blume.）の子葉が炭化したものと考えられる。しかし、他の試料については、いずれも微細であるため、種類を特定することは難しい。

(5) 考察

遺構の中からは、トチノキの可食部位である子葉が多量に出土した。トチの実はサポニンなどの「あく」を含むため、食用にするには灰汁などを用いた複雑な処理が必要となる。トチの実の利用は、遺跡からの出土例や石器の変遷などから、縄文時代中期以降に本格化したと考えられている（渡辺、1975）。今回の場合、敲石や磨石なども併せて検出されていることから、トチの実の遺跡内での加工・利用が推測される。トチの実は収量も多く、保存も利くことから、当時としては重要な植物質食料の一つであったと考えられる。トチの実の出土形態は様々であり（割られているか、割られていないかなど）、また地域的な傾向もあることから、このような情報をまとめて縄文時代の「あく抜き」技術の地域差を論じた例もある（辻、1983）。今後出土例の増加に伴って、このような地域的な実態把握も進んでくるであろう。

2．放射性炭素年代測定

(1)目的および試料

配石土坑SK17の年代を確認するため^{14}C年代測定を実施した。この土坑より出土した当時の植物質食料と考えられる炭化種実の細片を集め、試料とした。

(2) 方法

測定は学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。なお、半減期はLIBBYの半減期5570年を使用する。

(3) 結果

結果は3630±90y.B.P.（1680 B.C.：Code No.Gak－19276）であった。この年代は既往の資料（日本第四紀学会ほか1992）から縄文時代後期に相当すると考えられ、土坑内より出土した土器と調和する。

〈引用文献〉

渡辺　誠（1975）縄文時代の植物食．247p，雄山閣．

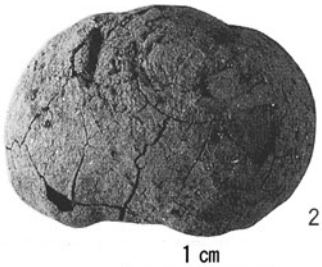
辻　秀子（1983）可食植物の概観．『縄文時代の研究２生業』，加藤晋平・小林達雄・藤本　強　編，p.18-41,雄山閣．

日本第四紀学会・小野昭・春成秀爾・小田静夫　編『図解・日本の人類遺跡』p.50,東京大学出版

図版１　炭化種子

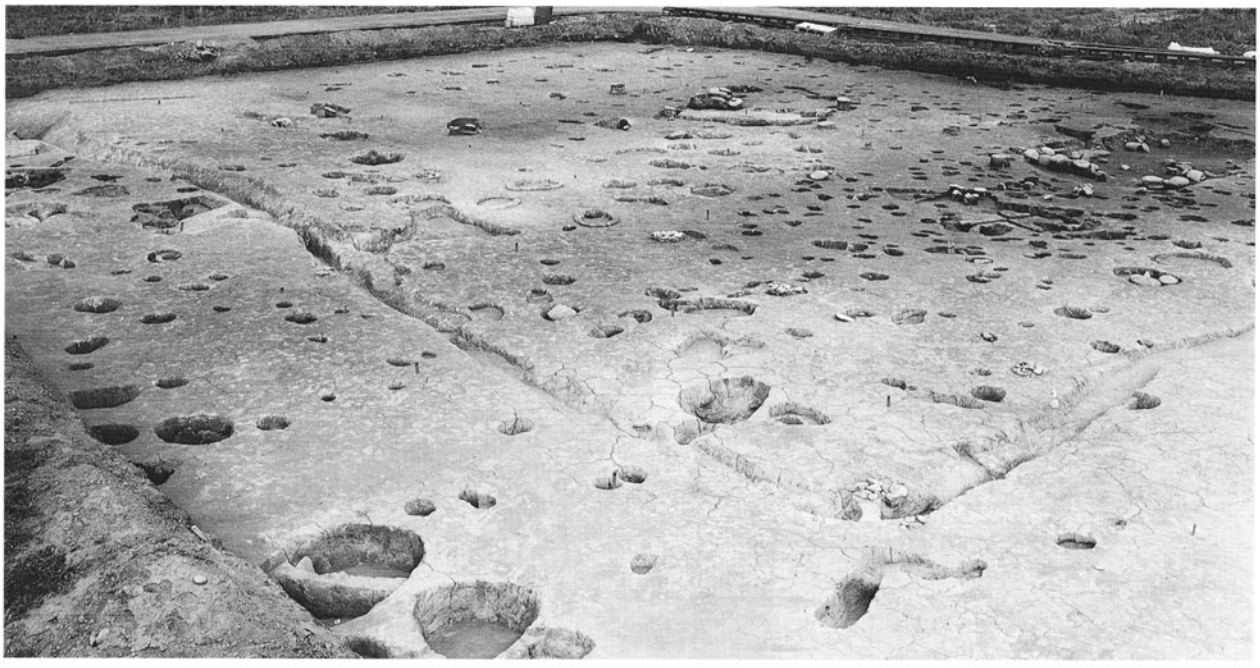
1-2. トチノキ（SK17）　1 cm

2 a

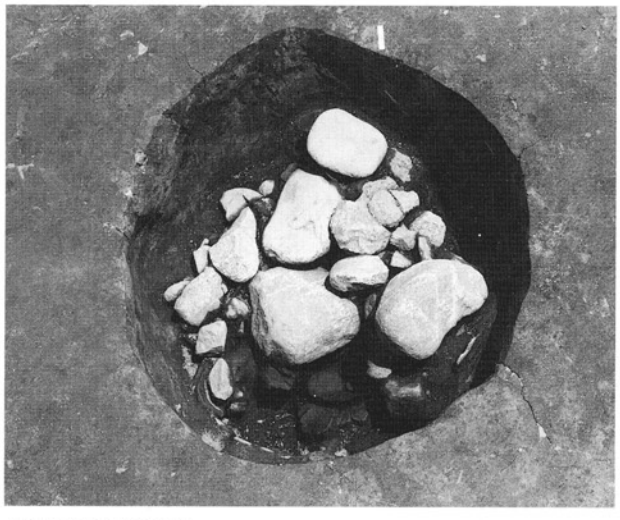


2 b

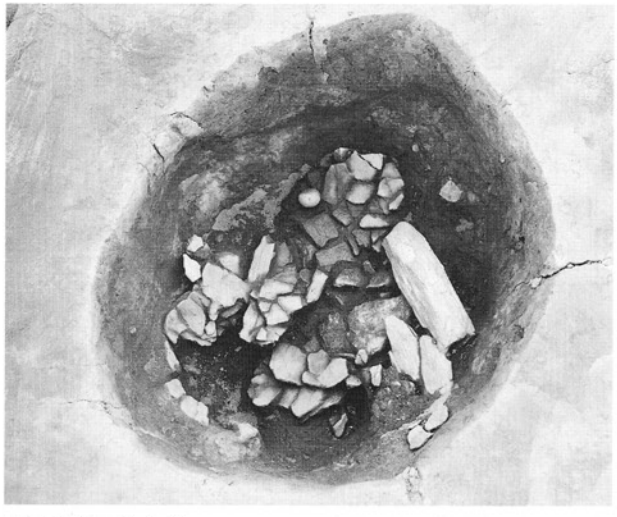
1 cm



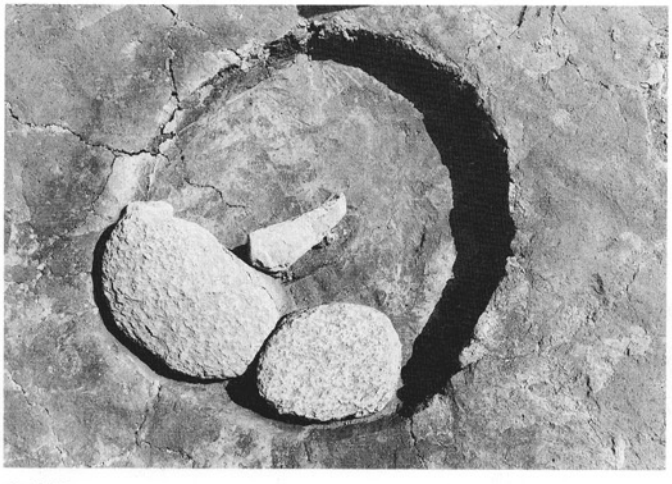
Ａ地区全景



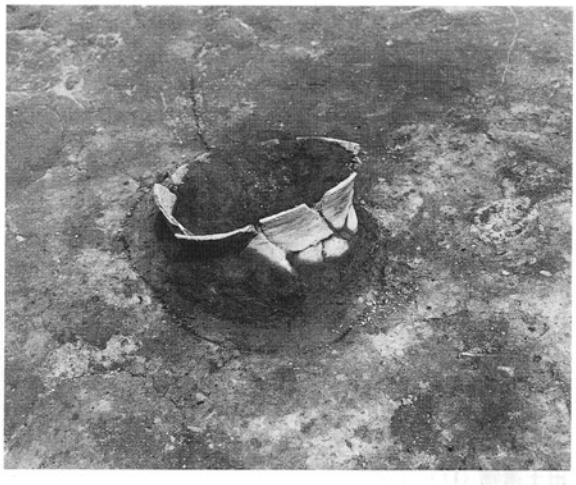
ＳＫ17集石除去前



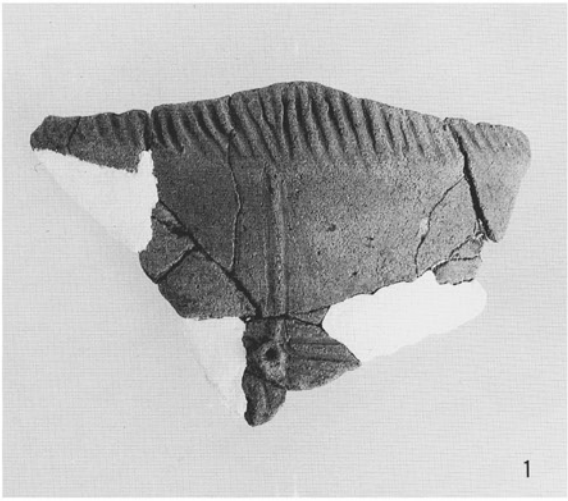
ＳＫ17集石除去後

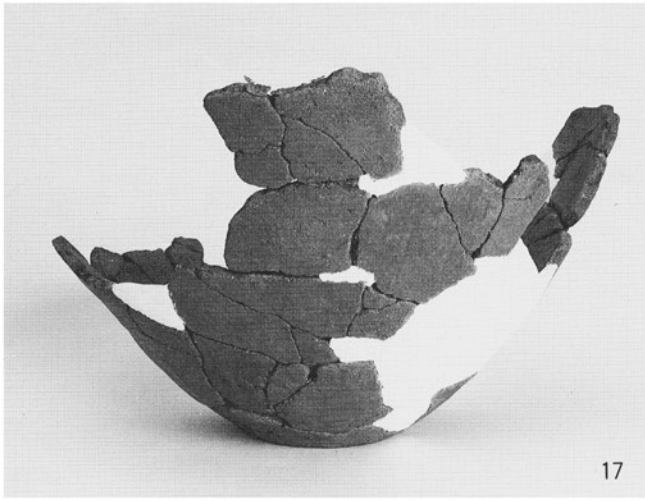


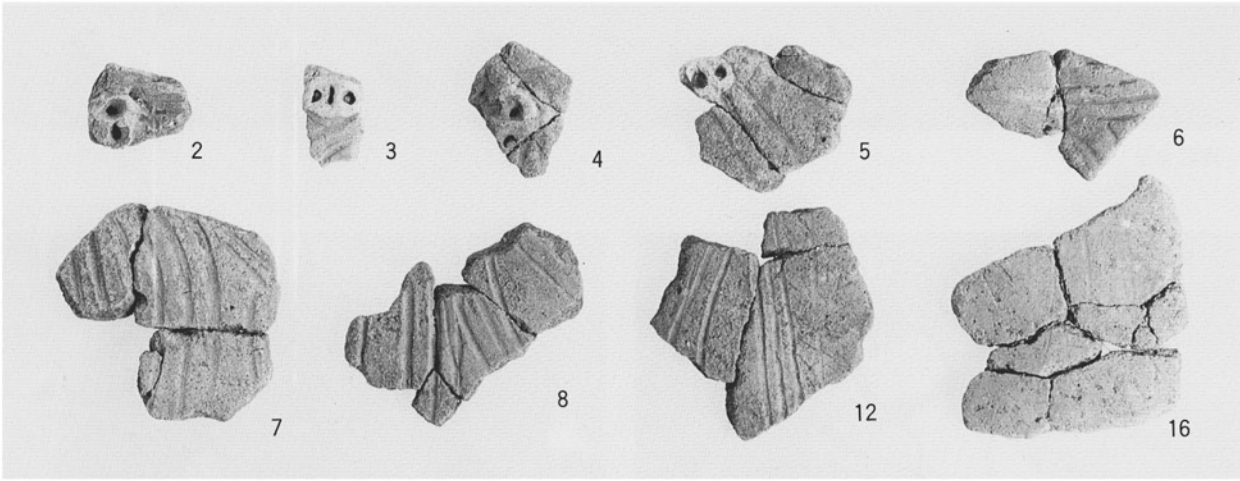
ＳＫ40

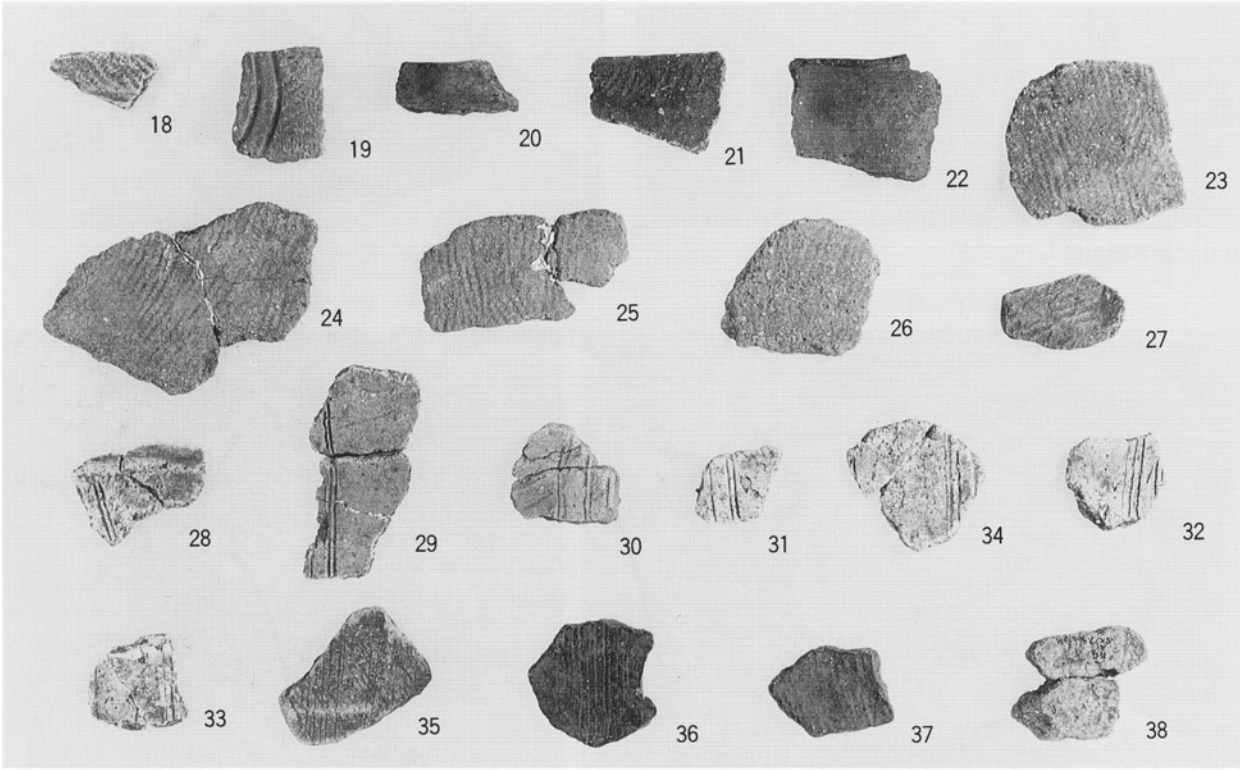


Ｐｉｔ１

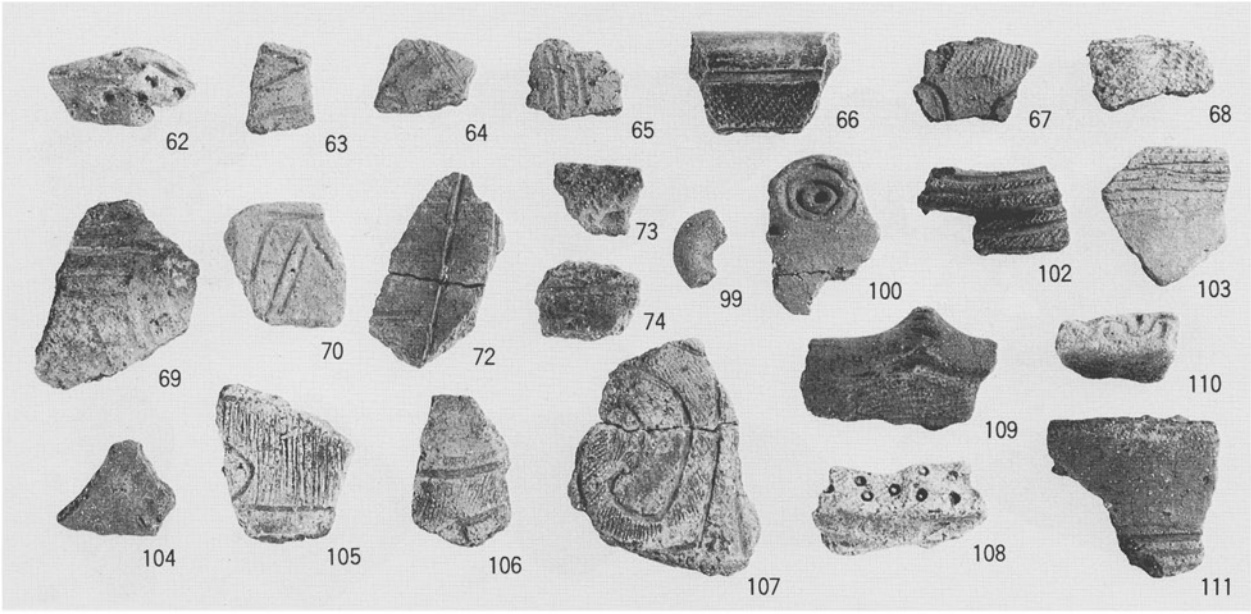

1

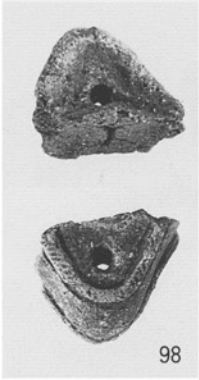

17

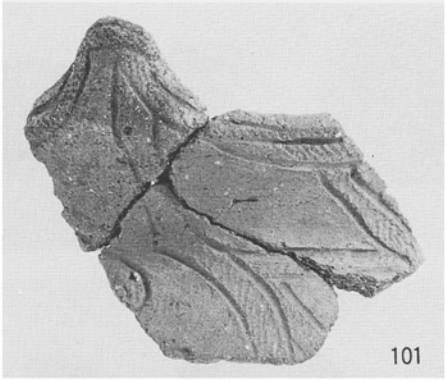

2
3
4
5
6
7
8
12
16

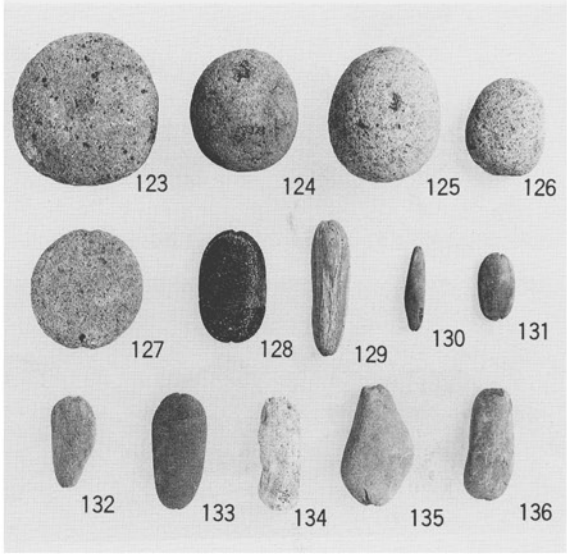

18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
34
32
33
35
36
37
38

出土遺物 (1)

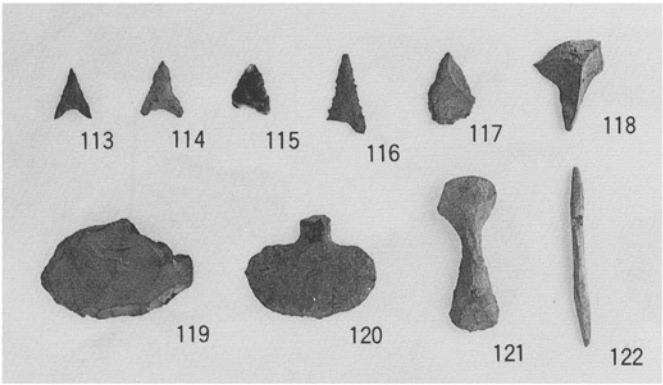

62
63
64
65
66
67
68
69
70
72
73
74
99
100
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111


98


101

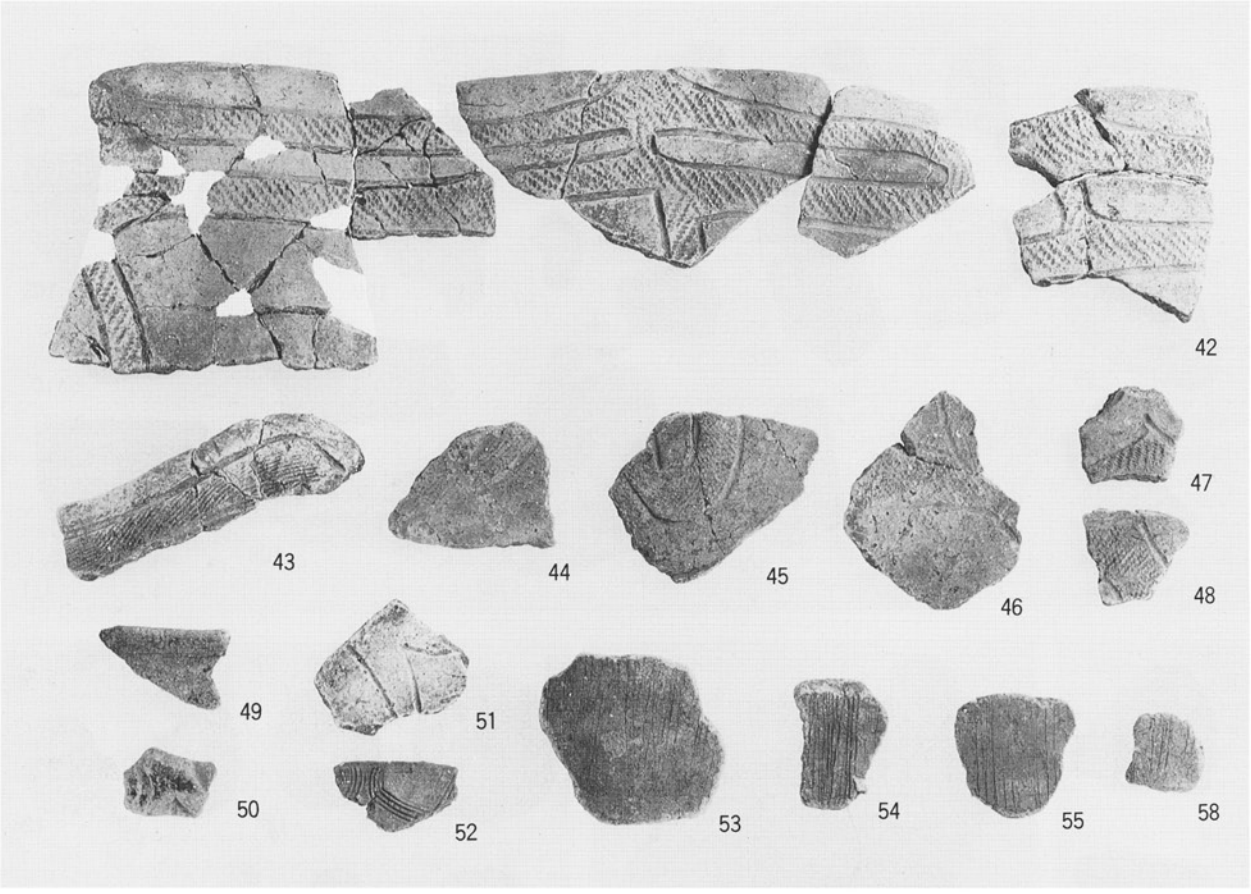

123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136

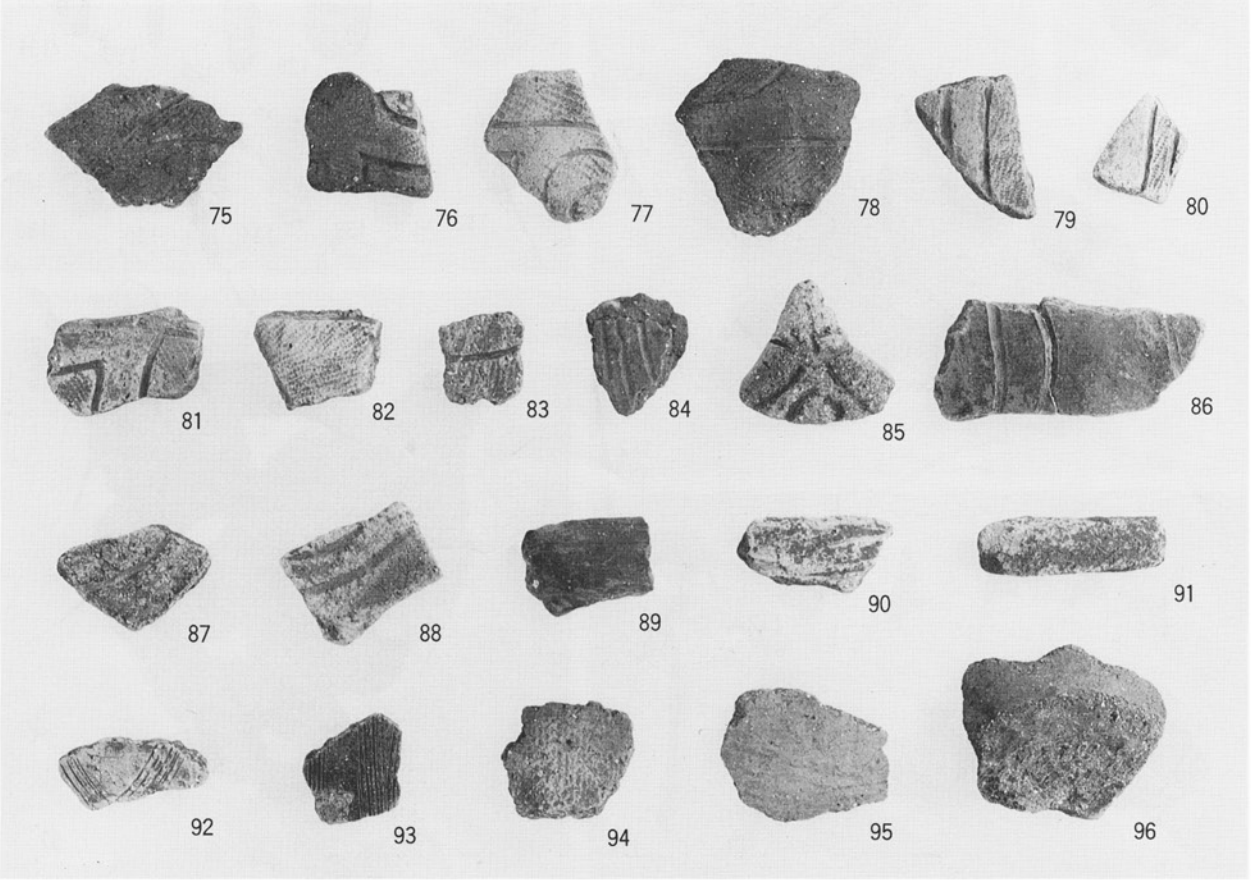
112


113
114
115
116
117
118
119
120
121
122

97

出土遺物 (2)


42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
58


75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96

出土遺物 (3)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いじりいせき はっくつちょうさほうこく
書名	井尻遺跡　発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	133-7
編著者名	西村美幸・松葉和也
所在地	〒515-03　三重県多気郡明和町竹川503番地　TEL 05965-2-1732
発行年月日	西暦1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
井尻遺跡（いじりいせき）	三重県多気郡（みえけんたきぐん） 勢和村波多瀬（せいわむらはたせ） 字井尻（あざいじり）	24444	444-4	34° 28′ 30″	136° 26′ 35″	19950710～ 19951005	本調査 1,900m² 立合調査 900m²	平成7年度 県営畜産環境整備事業 （多気勢和）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井尻遺跡	集落	縄文時代 鎌倉時代	石の入った土坑 埋設土器1基 掘立柱建物柱1棟 方形土坑1基 集石13基	縄文土器 石鏃・石錘 スクレイパー 堅果類 土師器・山茶椀	縄文時代後期前葉の良好な一括資料が出土

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年6月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 133-7

井尻遺跡発掘調査報告

1996. 3

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　㈲第一プリント社